〈隠された宝〉へ向かって
――ヘンリー・ヴォーン小考（八）――

森田　孟

無論、例外がないわけではなかろうが、真物の優れた芸術家は、どの分野、領域に於ても、外観、内容、方法、表現などがどれ程多彩、多様、複雑、多岐にみえても、その追求する主題は単一もしくはそれを巡っての狭い範囲であることが多い。裸婦像ばかり彫り、描くなどは素より、冬の樹木と森ばかり飽くことなく描く画家、睡蓮ばかり詠ってやまない詩人、庶民のありふれた哀歓ばかり、男女の葛藤ばかり、病者の生活ばかり…に焦点を当てまくる小説家、劇作家、音そのものを表現しようとする曲を作り続ける音楽家、結局は人間の運命をだ、人間と神との闘いをなのだ、時代の証人に徹しようとすることだ、等々、等々。結局は、などと言えば、殆ど全て単一の主題に収斂しかねない。彼らは真物ならば、決してマンネリズムに陥ることなく、単なる繰り返しでなく、螺旋状にぐいぐいと真物に到達しようとし、真実を抉り出そう、攫み取ろうとする。

ヘンリー・ヴォーン（Henry Vaughan, 1621–95）も正にそうだった。彼の代表作『火花散る燧石』*Silex Scintillans*（1650, 1655）に、同題、類題の作品が目立つ所以だろう。前号に取上げたもの以外にもまだある。

陽気さ　Chearfulness

〈主〉よ、どれ程の勇気を振い、大喜びしながら
　　私は一つ一つの事を為ることか

御身の極く僅かな呼吸が私の翼を支えて下さる時に！
　私は輝き、動いてゆく
頭上にあるもの同様、
そして（大いに喜びながら
悲しみを振り棄てて）
自ら夜な夜なを麗しい日々にするのです。

2

苦痛はこうして唯の楽しみになり
　たまたま何が起ころうと
もし御身がそこに居て下されば[1]やはりそれは歓迎なのです
　しかし自らの光線を
〈陽の差す〉日々に
御身はこうして貸し与え
自由に費すのだから
ああ！何を私はこれへのお返しにすればいいのでしょう？

3

おお　私は全身これ〈魂〉であって欲しい！御身が
どの部分もこの哀れな
罪深い体格を純粋な心に造って下さるように！
　そうすれば私は
私の一心を沈めて
御身を褒め讃えて[2]
〈**ハレルヤ**〉の一大〈合唱隊〉を
育てましょう　この地上で。

［**M**・四二八―二九］

訳注

（1）If thou be in't. G・ハーバート「苦痛」(Ⅲ)“Affliction”（Ⅲ）［六行詩三連計一八行の詩、**WiL**・二六五―六七］の二行目「それによって私は知ったのです　御身が苦しんでおられるのを」を参照［**M**・七三四］。

（2）to thy praise...below. G・ハーバート「最後の審判の日」“Dooms-day”［六行詩五連計三〇行の詩、**WiL**・六四九―五三］の二九―三〇行目「主よ、御身の乱れた合唱隊を強めましょう／そうすれば音楽が賞讃になるでしょう」を参照［**RA**・五五四］。

八音節の三行と四音節の五行（第一連はそのうちの一行が五音節）が、ABBCCDDAの型で押韻する三連、総

計二四行の作品。
　神の存在を身近に感じ取り、それに感謝することで、苦痛に堪えようとする。そのことで陽気な状態になれるし心地よいのだと語り手は言う。第一部に収録される作品。次のは第二部に出てくる。この語り手には厳しい自己省察は、それ自体喜びなのである。詩型の異なる同じぐらいの長さの作品だ。

喜び　Joy

生涯の方策は黙っていよう、もはや耳障りな音はない、私
には不協和はなく、君の美しい調べがある。
偽りのごまかしの音、巧く整えられた呻き声、そこでは心
遣いが変装して動き、溜息が空気を苦しませる。
白衣を纏った悲しみ、調律された悲嘆、〈蓬（よもぎ）〉成分の
糖衣〈薬〉、〈薔薇〉の冠を戴く〈髑髏（されこうべ）〉[1]。
彼は君の止むに止まれぬ口調（アクセント）を重んじない、何しろ
風か波によっても[2]自らに教訓を与えられる人なのに。
そのような人々には自らの盛んな日が分るが、その精気は
あの〈魔術師たち〉に宥められ〈無気力〉になるだろう。
　しかし汝の場合[3]、欠点は以来長らく星よりも多くの眼を
必要としており[4]、それなら汝の呼吸を風に匹敵するものに
高められそうだ、結局は低すぎると判明するだろうが、
汝はまた別の浮かれ気分になる、浮かれるといっても
雲や雨に覆われたものだが、それでも嵐を凌いで輝く
あの**澄み切った高み**と同じ程十分に穏やかで晴れやかだ。
　それ故さまざまに驟雨が
　優しい花々を打ち倒して治療する[5]間
　風が年月を　ある時は曇らせ
　ある時は澄み切らせて再生させる間
　死の苦痛の下で　必ず
　汝の眼と呼吸を共に盛んに働かせよう[6]。
　　〈木陰〉で木の葉が
　　各々の時間[7]を囁き
　　〈陰者の井戸[8]〉が
　　その〈庵〉の中で滴るように
　　溜息をつき眼に見えない涙を流しながら
　　通過してゆくのだ　汝の孤独な年月[9]は、
こうして過ぎてゆきながら或る〈木〉に書き残されるのだ
溜息が喜びを確かなものにし、揺さぶりが汝を固定すると[10]。

［M・四九一］

訳注

（1） a Deaths-head…Roses.『オリーヴ山』の中の「闇の中の人、即ち死論」［M・一八五・三八―三九］の中に次の一文がある。「薔薇の冠を戴く髑髏にはどのような美が存在するのか?」、及び「知恵の書」2・8で邪な人が言う「咲き始めたバラが萎れぬうちに、そのバラの冠をつけよう」を参照［M・七四七］。

「**花冠**」［M・四九二］の二四行目「我が頭上に〈薔薇〉を冠とした」がある［**小考**（七）28］。

「髑髏」は「死すべき運命」の象徴［RA・六〇三］。

（2） a winde or wave. G・ハーバート「一瞥」“The Glimpse”［五行詩六連計三〇行の作品、WiL・五二九―三二］の八行目「御身は風か波だったか」を参照［M・七四七］。

（3） as for thee. ヴォーンは自分自身に呼びかけている［RA・六〇三］。

（4） More eyes then stars. 泣くための、涙を流す眼［M・七四七］。

（5） Kill and cure.= beat down but at the same time refresh.［RA・六〇三］。撞着語法と言えよう。ヴォーンの愛用技法の一。

（6） ply both thine eyes and breath. = weep and pray. 泣いて祈る［RA・六〇三］。

（7） hours. 教会、聖職者に関する意味を弄んでいるか［同］。

（8） Hermit-wells. おそらく「隠者の席」‘Hermit-seat’との類推によろうが *OED* の例は十八世紀のもの［RA・六〇三］。

（9） solitary years. これは彼の最初の妻の死と二度目の結婚との間のことを暗示しているのかも知れない［H・一九七］。

（10） *shaking fastens thee.* G・ハーバート「苦痛」(五) “Affliction”(V)［六行詩四連計二四行の詩、WiL・三四九―五二］の二〇行目「我らは木々であり、それを揺さぶりが一層固定する」を参照［M・七四七］。

四音節四行、七音節六行、八音節二行、残りの行は十音節の、二行連句計三〇行の詩。

この作品も、死の苦痛の下で自らの眼と呼吸を働かせることで孤独な年月を遣らおうとする、そのことが「喜び」なのだと言う。

〈魔術師たち〉‘Charmers’とは、俗世間で人を魅惑する諸々を指すか。

この二篇とは対照的な?標題の作品もある。集中二番目

の長篇は第一部の終り近くに、集中最短篇に属する作品は第二部の初めの部分に収載される。

悲惨　Misery

〈主〉よ、私を縛って下さい、私が
自由への擒(とりこ)になるように、[1]
いやしくも御身に役立つ〈投獄〉のような
状態があり得るものとして、
風は、御身の手の内に集められても[2]
それでもやはり思いのままに吹くのだし[3]
御身が掴んでいるものを手放されるなら
その突風は大胆に争いを引き起すかも知れない。
　この地上で水はどっと解放されると
やはり低地を選んで追いかけてゆき
あらゆる方向に拡がりながら穴という穴を
〈河口〉を求め探し回るが　そのように
私の洩らした考えは御身から曲がりくねって
やってきて道を下って慢心に到るが
そうなると私の考えはすっかり彷徨い集中しようとして
そこで最初の最も険しい崖を見い出す、
私はそういう思考の流れに喝采し　既に高みに
達していたものに更に補給するが
こうしてこういう役割を果し終えて
私は我が心の吐き出したものを糧とするのだ。[4]
私は自らの手で作った垣根を壊し
それからその影の中へあの侵入を果す
何枚かの無花果(イチジク)の葉を　それでも私は工夫する[5]
まるで御身には耳も〈眼〉もなかったかのように。
多すぎる友人、言葉、それに葡萄酒が
私の盛んな日を支えてくれる間、御身は
全く気付かれないまま輝き続け、御身の書物は
一点の貧相な様子さえ見せない。
もし御身がその笑いさざめきの中に忍び込んで
親切にも私に　**我は〈大地〉なり**　と告げるなら[6]
私は御身を閉め出し　それを消し去ろう、
そのような〈音楽〉は　友情を損ってしまうのだ。
こうして私は惨めになり　甚だ思いやりの心を失って
敬愛してやまない〈神〉を我が心から締め出し
あの〈庵〉を〈王宮〉[7]にしそうな彼をそこから

締め出すのだ、本人がそこに住んでいるとしてだが。
彼は去ってゆき、屈服する。酷く当惑して
それ故彼の聖霊は嘆き悲しむのだ、
この強力な〈神〉、永遠の〈王〉は
〈塵(ダスト)〉のために唯、嘆き、〈塵〉は唯、歌う。
しかし私は突き進み　急いで我が身から
理性を〈剝ぎ取り〉、遂にはうち拉(ひし)がれて
身も心も倦み果てた挙句
自らの恥と悲惨を証拠立てることになる。
翌日　私は御身を求めて泣き叫ぶ
その時私の近くには居て下さらない筈だから、
だが、今やそれは御身の僕(しもべ)の喜びなのだ
御身は彼に彼の尺度を与えなければならないし（与える）。
御身は与え、やって来て　雨霰と降る治療用の
芳しい物となって御身自ら　私の傷の
中に注ぎ入って　今度は御身の恩寵が
（私にはそれが十分分かる）あらゆる所に満ち渡る、
私は御身の傍に坐る　この新たな光を浴びて
そしてその時間にこそ御身は私の歓びとなる、
誰もこの世をこれ程蔑むことは出来ないし
御身の偉大な慈悲をこれ程尊べもしないだろう。
私は我が〈眼〉を〈訓練し〉[8]て断固として住みつくのだ
私の〈庵〉の〈円周〉内に、
その〈平穏(カーム)〉と静寂は私の〈喜び〉だが
御身の平安(ピース)と較べれば単なる騒音にすぎない。
遂に私は頭が痛むのを感じ
指は〈むずがゆく〉なり　燃えるように何か新しい
〈仕事〉に就きたくなり　私は内部が
膨らみ　泡立ち　苛立ち始めるのだ。[9]

「時代は、現代は、静かに[10]
安楽なままでいることはなく〈小屋〉を包囲し
行動と血とが今や勝負に勝つ、
軽蔑が平和な名前を踏み躙り
家庭で坐っている者も荷を担う
戸外でうろつき回る者たちより大きなのを」。

こうして私は御身の贈物を私への賜わりものにする、
御身と口論する唯一の者である私への、
私は御身の諸手が結わえた結び目を解(ほど)いて
それから旅立つか争うか死ぬかするだろう。[11]
何千という無謀で無益な〈注入物〉[12]が

波のように私の決意に襲いかかる、
炎が燃料を得て走り回り[13]
全てが燃え尽きるまで荒れ狂うように
私の荒々しい魂は忙(せわ)しく立ち回って
全てが終るまで決して休むことはない。
こうして御身の音楽の中には一かけらも
ない気難しい心[14]に荒立って
私は御身に激怒し、私の平安を
〈無気力〉だと、唯の病気だと、
否、御身の眼から射られるあのきらめく光線[15]だと呼んで
こういう反抗を示す自分を鎮めようとして
唯の気分だと称するのだが　それが起きるのは
ある定まった時々で、それが御身の恩寵なのだ。
　こういうのが人間の生活であり、こういうのが私と
いう最悪の人間のものだが　それでも御身のものなのだ、
依然として自分のものだと御身は御存知だ、もしそうで
ないなら　私を私の敵へ引き渡して下さい。
それでも御身が人間を善良にするのは
彼にそうあれと命じるのと同じぐらいた易いのだから
一目で（彼ならそう出来るだろうから）
彼をそのあらゆる苦痛から解放するために[16]
おお、私に御身の神聖な丘から
多くのお力を送って下さい、御身のあらゆる
楽しみ（どのようなものであれ）と
神聖な〈意図〉で私を満たせる程に。
私の岩めく心を開いてそれを一杯にして下さい
御身の意志への従順さで、
そしてそれを封印して下さい、そうすれば誰にも見えない
ように誰も御身以外はそこへ入っては来れないでしょう。
　おお我が〈神〉に耳を傾け、彼を聞こう、その血が
私のために多々増々弁じて下さるのだ！
おお我が〈叫び〉を御身の王座に届かせたまえ！
我が叫びは涙だけを伴って注がれたのではなく
（涙だけでは往々にして汚いのだから）
我が精魂込めた血と共に
霊の囁きと誠実な呻き声と共に
忠実にしかもこの上なく悔い改めの苦しみの声を出して、
こうして私は泣き叫び、思慕を叫び続けるのだ、
御身が私を修復して御身のものにして下さるまで。
［M・四七二―七四］

訳注

（1）「**夜明け時**」の注（6）［本稿後出］参照［**RA**・五八三］。

（2）「箴言」30・4「手の内に風を集めた者は誰か、纏える衣に水を包んだ者は誰か」（ヤケの子アグルの託宣の一つ）［**M**・七四三］［**F**・二三九］。

（3）「ヨハネによる福音書」3・8［同］。「風はその思いのままに吹く。あなたはその音を聞いてもそれがどこから来てどこへ行くのか知らない。霊から生れた者も皆そのとおりである」。

（4）「箴言」26・11「犬が自らの吐いたものに戻るように愚か者は己の愚行に立ち返る」［**RA**・五八四］。

（5）「創世記」3・7「二人の眼は開かれ自分たちが裸であることを知った、それで彼らは無花果の葉を綴り合わせ前垂れにした」［**F**・二四〇］。

G・ハーバートの「嘆息と呻き声」“Sighs and Groanes”［「少なくともバイブルの異なった一二箇処を反響させている」六行詩五連三〇行の作品、**WiL**・二九七―三〇〇］の一五―六行目「私の情欲は／尚も無花果の葉を撒き散らして御身の光を締め出そうとしたのだから」を参照［**M**・七四三］。

（6）G・ハーバート「教会内記念碑」“Church-monuments”［六行詩四連計二四行の詩、**WiL**・二三四―三八］の一三行目「塵の友情を断ち切る」と比較［**RA**・五八四］。

（7）G・ハーバート「一瞥」“The Glimpse”［五行詩六連計三〇行の詩、**WiL**・五二九―三二］の二九―三〇行目「お私をそれらの慰みものにしないで下さい／御身が来て下されば王宮になれるかも知れないのです」を参照［**M**・七四三］。

（8）I School my Eys,...Cel. G・ハーバート「屈辱」“Mortification”［六行詩六連計三六行の詩、**WiL**・三五二―五六］の二〇―二二行目「家を構え家庭を得てそこで彼は動き回る／自らの呼吸の円周内を／己が眼を訓練しながら」を参照［同］。

（9）ここからの一〇行、G・ハーバート「目まい」“Giddinesse”［四行詩七連計二八行の詩、**WiL**・四四五―四七］の九―一一行目「今や彼は闘い抜くであろう／今や平和なうちに自分のパンを食べて／静かに安楽なままでいることだろう」を参照［**M**・七四四］。

（10）*To snudge in.* = To remain snug and quiet, to nestle. *OED* がこの箇処を引用する［**F**・二四一］。

（11）G・ハーバート「自然」“Nature”［六行詩三連計一八行の詩、**WiL**・一五四―五六］の一―二行目「反逆に満ちて、私は死ぬか／争うか、さもなければ旅をするかだろう…」を参照［**M**・七四四］。

（12）Infusions. 狡猾な示唆、ほのめかし。*OED* の2b、特

に Clarendon　からの引用［RA・五八四］。

（13）flames…wind. G・ハーバートの「ヨルダン」（二）“Jordan”（II）［六行詩三連計一八行の詩、WiL・三六五―七一］の一三―一五行目「彼らが登ってゆく時　炎が荒れ狂うように／私は我が自我を編んで分別を得る、／しかし私が立ち回っている間…」を参照［M・七四四］。

（14）wilded by a peevish heart. G・ハーバートの「シオン［エルサレムにある丘］」“Sion”［六行詩四連計二四行の詩、WiL・三八一―三］の一三行目「そこで御身は気難しい心と取っ組み合って…」を参照［同］。

（15）those bright beams… G・ハーバートの「星」“The starre”［四行詩八連計三二行の詩、WiL・二六七―七〇］の一―二行目「光線が我が〈救世主〉のお顔を囲んでいる／明るみから発射された明るい閃光」を参照［RA・五八四］。

（16）To look him out of all his pain. G・ハーバートの「一見」“Glance”［八行詩三連二四行の詩、WiL・五八八―九一］の二一行目「御身が私を苦痛から解放しようとなさる時」を参照［M・七四四］。

全て八音節詩行の二行連句全一一四行の作品で、「神と口論する唯一の者」である「私」が、悲惨になる有様が瞑想・展開される。自分の頑な「岩めく心」、これが罪なのだとこの語り手は訴え続け、自分を「修復」して受け入れてくれるようにと、神への思慕を表明する。それ故か悲惨もこの語り手には実際は悲惨ではないのだ。彼が流す涙は甘美なのである。「真物の偽りなき詩を書く」〈苦悶〉を訴えた作品［小考（七）33］の次に、小篇の「涙」が現れる。

涙　Tears

おお我が〈神〉、我が栄光が　御自らの
　　白い神聖なお供を[1]
あの澄んだ潑溂たる　一点の**汚れ**もない
　　〈**泉々**〉へと伴い行く時！

全てが**光**で　**花々**で　**果実**で
　　喜びで　**休息**である所で
それら（私の一揃いだ！）の中で私を
　　最後のものでしかも最小のものにして下さい。
そしてそれら全てが養われ　御身の

　　潑溂たる流れの水を飲んでしまったら
御身の哀れな〈驢馬〉[2]に（涙ながらに私は切望する！）
　　それらに倣って飲むようお命じ下さい。
御身の愛は最高の感謝に値いし、私の罪は
　　最低のピッチ[3]です、
しかし**甚だしく愛する**[4]人が支払うなら
　　御身は物乞いたちを裕福になさったのです。
［**M**・五二六―二七］

訳注

（1）train.［通常地位の高い人に従い、伴をする人の群］（*OED* train sb[1] 9）. ヴォーンは、魂を救われた人々の一群を指して使う［**RA**・六三一］。

（2）thy poor Ass. ヴォーンの「**驢馬**」［本稿後出］二一行目に「御身の〈驢馬〉たる私を」と出てくる［**M**・七五一］。

（3）pitch. 絶頂、音の高さ。譬えや引喩として、鷹が獲物にさっと飛びかかる前に一旦舞い上る高さ、を指す。ヴォーンのはかなり奇妙な使い方にみえる［だから形而上派詩人なのだ―森田］。この語はもっと一般には、「最高のピッチ」という句で現れるもの［**RA**・六三一］。ここでは、コールタール、木タールなどを蒸留した時に残る黒くよく固まる粘性物質、の意味の方が面白い。

（4）who *loves much*.「ルカによる福音書」7・47「彼女の多くの罪は許される、彼女が甚だしく愛したからである」。「支払う」'pays'に関しては香油（オイントメント）の価格が「ヨハネによる福音書」12・5で言及される。ヴォーンはキリストが自らに述べた言葉を使っている。「甚だしく愛する」故に多くを「支払う」のはキリストであり、それにより「物乞いたちを裕福に」するのである。マグダラの聖マリアの物語への言及が、「涙」と題される詩には相応しい［**RA**・六三二］。

　奇数行同士、偶数行同士が順に押韻してゆく四行詩四連で、音節数は第一連と第三連が一行目から順に８６８４、第二、第四連が、同じく８４８６という組み合わせである。

　既に「**後退**」［**小考**（一）17］は紹介ずみだが、同じ第一部に「**逆戻り**」と「**引退**」が出てくる。後者は同題でもう一篇、後年の詩集『甦ったタレイア』*Thalia Rediviva*（1678）にも登場するほどである。ヴォーンは実際、後退しながら進み、引退しながら再出発する人物なのだ。

逆戻り　Relapse

我が〈神〉様、何と慈悲深いことか御身は！　私はあわや
　　地獄へ滑り落ちそうになり
あの暗い恐ろしい奈落の淵で
　　彼らがわめくのを聞いた、
だが　おお　御身の愛は！　御身の豊かな全能の愛は
　　私の魂を救い
彼らの憤激を抑えたのだ、私が彼らが動き回るのを見
　　吠えるのを聞いた時に、
おお　私を唯一〈慰めて下さる方〉よ、採らないで下さい
　このような道[1]は
　　この忌まわしい径（こみち）は、
そうすれば私は一刻の猶予もなく私自身の道を修正します
　　御身はお怒りを収めて下さい！
私には濃密なエジプトの湿気は当然の報いでした[3]
　　私の行為は何しろ暗くて
私の内部は**霞み**、御身の霊が油を差される
　　あの灯火を消す程だったのだから、
刺し傷と恐怖に充ちた突進する〈良心〉、
　　陰は〈イチイの木〉[4]だけ、
陰鬱で悲しい〈日蝕月蝕〉、〈曇った〉天体、
　　こういうのが私の帰属すべきものです。
しかし自らの血で（余りにも貴重な値）
　　私の負債を払って下さった方（かた）が
私に命じ賜うたのだ、その方から発する美徳によってここ
　で所有権を主張せよと[5]
　　この上なく輝かしい日に、
爽やかな穏やかな思考に、優しい〈**百合**〉の陰、〈穏和な〉
　流れに
　　十分な真実な喜びに、
爽快で芳しく馨る朝な朝な、そして永遠の光線、
　　こういうのがあの方に帰属すべきも
　　のなのです。

［**M**・四三三］

訳注

（1）these wayes…path. G・ハーバート「鍛錬」“Discipline”［四行詩八連計三二行の詩、**W**i**L**・六二〇―二三］の第

一連「御身の苔を投げ棄てよ／御身の怒りを投げ棄てよ／おお我が神／穏やかな径をお取り下さい」を参照［M・七三五］。

（2） without delayes. G・ハーバート「感謝祭」“The Thanksgiving”［二行連句計五〇行の作品、WiL・一一一―一一五］の三四行目「しかし一刻の猶予もなく私自身の道を修正する」を参照［同］。

（3） この行と次行、G・ハーバート「溜息と呻き」“Sighs and Grones”［六行詩五連計三〇行の詩、WiL・二九七―三〇〇］の一四―一五行目「私には当然の報いだった　エジプトの夜は／私の力の悉くを強くしたのも」を参照［同］。「出エジプト記」10・22「主はモーセに言われた、汝の手を天に差し伸べよ、エジプトの地を覆う闇が、感じられる闇までが、あるだろう」。エジプトの災厄の一つに言及［RA・五五八］。

（4） *Yeugh.* 通常、墓地に植えられている［同］。

（5） chalenge here / The brightest day. G・ハーバート「告白」“Confession”［六行詩五連計三〇行の詩、WiL・四四二―四五］の二八行目「私はここで所有権を主張する、この上なく輝かしい日に」を参照［同］。

十音節行と四音節行が交互に反復し、ABABCDCD…と押韻してゆく二八行の作品である。

引退　Retirement

彼方の〈紺碧の〉王座[1]に坐って
　家は金星の
上方に閉ざしたまま
　星の見劣りのする見せ物と
外部の道具類を　自分の邸宅の
　一部でもある輝く
栄光だとする人、〈その方（かた）〉がある日
　私がすっかり道に迷った時
　他ならぬ愛ゆえに
　自らの柔和な〈鳩[2]〉によって
私に家庭を示し　家路につかせて下さったのだ。

2

十分だ　遂には汝の欲望の
　発作が（と彼は言った）
思うがまま突き進んだ[3]とみれば、

押しつけないでくれ
いつまでも汝自身の敵で私自身のでもあるようになどと、
何故なら
この日まで私は実際手間どって
見ようとはせず、瞬きするのを選んだのだ、
否、あらゆるものの
正に瀬戸際で
汝が堕落せんとする時には
私の**愛の撚り紐**[4]が汝を支え上げ、私の**目に見えない絆**にするのだから。

3

私は汝をよく知っている、私が造ったのだから[5]
それで汝を憎んだりしない、
汝の精神もまた私のものだ、
私は知っているのだ　汝の運命を
範囲と端を、私の手が汝の手のものと
された紐を引いていたのだから、
もしもだから汝が私の席にやってきても
それは拍手喝采ではなく、塵(ダスト)の
妙技であり、土(クレイ)が
そのように導くのだが
そのような愚行からは断固たる〈後退〉あるのみだ。

4

今やここの下界でまだ服従しないまま
汝はこのように彷徨っているが
私は一軒の家をあそこの天界
同様に所有している
その中に私の〈**名前**〉と**栄誉**の両方が現に宿っており[6]
宿ることだろう
私が万物を新しくするまで[7]、そこには華やかなものは
何もない
香水にもあるいは〈装い〉にも、
塵は塵と共にあり
唯　正に抱(いだ)いているのだ
あの　あらゆる土(クレイ)の場合と同じ〈敬愛〉と部屋を。

5

信頼できる学校、そこでは汝は見ることが出来そうだ[8]

石の〈紋章〉に
無言の〈大地〉に
汝の真物の家系を、
そこでは死者たちが教え諭し、変えられるのだ、祝宴と浮かれ騒ぎを
葬儀に　そして〈**四旬節**〉に。
そこでは塵[9]が　扉から汝の眼を
一杯に満たして尚も汝を盲目にしながら
熟睡している、
では上にいて　その扉の内部に
居て[10]、（私の扉々は）聞いているのか？　**私はそうする**[11]。

［**M**・四六二―六三］

訳注

（1）G・ハーバートの「謙虚」“Humilitie”［八行詩四連計三二行の詩、**WiL**・二五六―五九］の一―二行目「私は〈諸々の美徳〉が手に手を取って坐っているのを見た／紺碧の王座に幾列かをなして」を参照［**RA**・五七八］。

（2）his mild Dove. G・ハーバートの「悲惨」“Miserie”［**小考**（七）18以下］の二八行目に‘thy mild Dove’［同］。

（3）G・ハーバートの「苦痛」（一）“Affliction”（I）の二〇行目「私は思うがまま突き進んだ」［同］。

（4）*My love-twist*. G・ハーバートの「真珠」“The Pearl”［一〇行詩四連計四〇行、**WiL**・三二〇―二七］の三八―三九行目「しかし御身の絹の撚り糸が天から私に降りて来て／私を教え導く…」参照［**M**・七四二］。

（5）I have fram'd…「知恵の書」11・24「あなたは存在するもの全てを愛し、お造りになったものは何一つ憎まない、何ものにしろ憎んでおられたなら、お造りにはならなかったであろう」［同］［**RA**・五七八］。

（6）「詩篇」26・8「主よ、御身のいます家と御身の栄誉の宿る所を私は愛しています」［**RA**・五七八］。

（7）I make all new.「ヨハネ黙示録」21・5「すると王座に坐っておられる方が言った、見よ、私は万物を新しくすると」
ヴォーンの「**最後の審判**」の最終行「何もかも新しくして下さい」［**小考**（六）21］
同じく「**書物**」の二七行目「あらゆるものを再び新しくする時」［**小考**（四）11］［**M**・七四二］。

（8）ここからの四行‘A faithful school…descent;’はG・ハーバートの「教会内記念碑」“Church-monuments”［六行詩四連計二四行の詩、**WiL**・二三四―三八］の六―九行目「それ故私は喜んで委ねる／私の身体をこの学校に、そうすれば彼の元素を／判読することを学び、彼の誕生が

／埃っぽい紋章の一行一行に書かれていることを見い出せよ」と比較せよ［**M**・七四二］。

（9）　ヴォーンの「**混乱**」“Distraction”［本稿後出］の二九―三〇行目に「鎮めて下さい　御身の光で／立ち昇って私の視力を霞ませそうな塵を」がある。

『オリーヴ山』の序文「読者へ」［**M**・一四一・六―七］の「それ故この世の塵が偶々汝の眼をちくちく刺すなら盲目になるまで放置してはならない」、及び、G・ハーバートの「脆さ」“Frailtie”［八行詩三連計二四行の詩、**WiL**・二五九―六一］の一五―一六行目「以前塵であったものが素早く立ち昇って／私の眼をちくちくと刺す」参照［**M**・七三二］。

G・ハーバートの *Outlandish Proverbs*（No.570）には「塵を吹き上げる者はそれで自らの眼を満たす」がある［**RA**・五四五］。

（10）　Keep…my doors.「詩篇」84・10「邪悪な者の天幕に住むよりは　私の神の家の門番であることを選びます」。

（11）　G・ハーバートの「鉄の首枷」“The Collar”［音節数の異なる三六行の詩、**WiL**・五二四―二九］最後と比較せよ［**RA**・五七八］。「私はある呼びかけを聞いたように思った、**子よ**と／それで私は応えた　**我が主よ**と」。

ABCBCCDDEEDの型で押韻する（第五連だけ前半がAABCB）一一行の各行の音節数は、順に8 4 6 4 10 4 8 6 4 4 10で、五連から成る五五行の作品。何だか退くのを逡巡しているような形状も注目されよう。

動物とその関連現象が標題の作品が第二部に現れる。まず、雄鶏の啼き声である。

鶏鳴　Cock-crowing

光の父よ！[1]　何たる〈陽に照らされた〉種子を[2]
何たる真昼の一瞥を　御身は閉じ込めたのか
この鳥に？　あらゆる種類に
この活潑な〈光線〉を御身は当てがわれたのだ
彼らの磁力は[3]　夜通し効いている、
〈天国〉の夢と光も。

彼らの眼は朝の色合いを求めて凝らされ
彼らの小さな粒は夜を追い払いながら[4]
烈しく輝き歌う、まるで光の家[5]への
径（こみち）を知っていたかのように。
彼らの蠟燭[6]がどれほど燃やされたにしろ

太陽に銀を着せられ[7]照らされているみたいだ。
もしそのような精神(テインタチャー)[8]が、そのような特質(タッチ)[9]が
それほど確たる憧れが強力なら
御身自身の似姿[10]が十分思い巡らすのではないか
御身の現れ賜う時間を眼を凝らして待とうと。
もし唯の突風が帆を一杯に孕ませても
〈神〉の息吹[11]が支配力を失くしたことになるだろうか?

おお御身　不滅の光と熱よ!
その手はこの身体(からだ)の隅々にまで輝き[12]
それはその座席の美しさによって
我らにははっきり見える、同じものを作ったのだから。
見えるのだ、御身の種子は私の裡(うち)に住みつき
御身はその中に、私は御身の中に、宿るのが。

御身なしに眠ることは　死ぬこと、
そう、それは地獄の性質を帯びる死、
そこでは御身が閉ざすわけではないので
眼は決して開かないのだと私には分る。
そのような暗いエジプトの国境[13]には
死の陰が住みつき　秩序を乱す。

もし喜びと希望と真摯な苦闘、
それに〈脈拍〉が光を求めて静かに打つ心臓とが
鳥たちに与えられるなら、誰が、御身の他(ほか)に知るだろうか
恋煩いをする魂が飛翔を褒め讃えたのだと。
魂は彼の眼以外の眼によって追跡されることが
あるだろうか、彼らに飛ぶ翼を与えたせいで。

御身が破り棄てたこの〈覆い(ヴェイル)〉[14]だけが
そして私のもこれから破られる筈の
この覆いしか、と私は言いたいが、御身を私から
影で隠す外套となり雲となるものはない。
この覆いは御身の正視する愛を否定[15]し
輝きと破片だけを見い出すばかり。

おお　それを取り払って下さい、くずくずせずに、
私に御身の光でブラシをかけて下さい、私が

申し分のない真昼へと輝くように、
そして私を御身の栄光に満ちた〈眼〉で暖めて下さい！
　おおそれを取り払って下さい！せめてそれが飛び去るまで、
　〈百合〉[16]はなくても私の許に留まって下さい！
［M・四八八―八九］

訳注

（1）Father of lights.「ヤコブの手紙」1・17「良い贈物、完全な賜物は全て上から光の父から来るのです、御父には移り変りも天体の動きから生ずる影もありません」［M・七四六］。

（2）What Sunnie seed. ホウムズ［HEi・三六―三八］は次の文章と比較する。「彼女［精神］は自らの〈働き〉で導かれるが、それは**〈精神の形而上の粒〉**、あの、**最初の〈光の父〉**から降りてくる単純で何ら混り物のない〈光〉の〈種子〉もしくは〈輝き〉による。何故なら彼の**正視する**〈愛〉は〈**人間**〉にしか輝きを放たないが、それでも〈世界〉のあらゆるものは〈保持〉されるようにと、ある程度は最初の〈**叡智**〉が**特質**（タッチ）によって指示されているのである」（Thomas Vaughan, *Anima Magica Abscondita*, 1650, p. 13）. この詩の四一行目にも出てくるが、「正視する〈愛〉」'full-ey'd Love'はG・ハーバートの「一瞥」"The Glance"「八行詩三連計二四行の詩、WiL・五八八―九一」の二〇行目「御身の正視する愛」に由来する［M・七四六］。これはヴォーン同様トマスも、ハーバートを読んでいたことを示すもの［RA・五九七］。

雄鶏の「太陽の影響を受ける」性質は、コルネリウス・アグリッパの『オカルト哲学の三巻』によって主張されている。「鳥の中ではこれらは太陽の影響を受ける…日の出の時に歌うものたちで、太陽が起きるように呼びかけていると雄鶏は…」（Cornelius Agrippa, *Three Books of Occult Philosophy*, I. xxiii.）. ヘンリー・ヴォーンがアグリッパを讃えていることは『オリーブ山』［M・一七六］で彼を「偉大な哲学者にして〈自然〉の〈秘書〉」と呼んでいることでも明白である［RA・同］。

「陽に照らされた種子」'sunny seed'「真昼の一瞥」'glance of day'「活潑な光線」'busy ray'「磁力」'magnetism'は、実際は同義語であることに注目してよい。この詩の思想を強調しているのは、動物は神に定められた各々の機能を本能によって果すのに対して、人間にあっては本能が道を踏み外しているのだから、人々は理性に従うことによってしか正しい行動は出来ないのだという錬金術の概念である［RA・同］。種子'seed'光の一瞥'glance of light'粒'grain'は、光の「父」から生ずる魂の精神性

という特質を表す三つの錬金術用語である［F・二七六］。

（3） magnetisme. 神によってこの鳥の中に植え込まれた能力で、そのために光に惹きつけられるのである。この語は「以前、磁力と混同されていた別の魅惑力に用いられた」（*OED*）［RA・五九七］。

（4） expelling night. これは特にパラケルサスによって表明された錬金術の観念で、「影響力 'influence' とは、小宇宙 'microcosm' と大宇宙 'macrocosm' との間の二方向の過程であった」［RA・同］。

（5） house of light. 弟トマスの論著の標題だった。*Aula Lucis, or The House of Light*, 1652.［M・七四六］。

（6） candle. ケンブリッジのプラトン学派の徒はしばしば、ロウソクを暗喩に用いて（「箴言」20・27「人間の精神は主のロウソクである」に由来）心の精神能力を指した。雄鶏の場合のロウソクは、雄鶏に神によって植え込まれた本能のことで、人間の場合の理性に似たもの。古英語詩ではロウソクなる語は、太陽そのものを指して使われたのであり、トマス・ヴォーンの次の文章にその反響がみられる。「その偉大な世界は、自らの〈生命〉を表す〈太陽〉と〈蠟燭〉を所持している」（*Lumen de Lumine*, p. 41）［RA・五九八］。

（7） tinn'd. 「銀めっきした」。=kindled「点火した」［F・二七六］［RA・同］。トマスの「これは〈神〉の秘密のロウソクであり、それを彼は〈諸要素〉の中で点火した」［同］参照［RA・同］。点火された結果、銀を被せられたようになったのだ。原語の意を当然ながら拙訳には生かした。

（8） tincture. 錬金術の用語。精神、本質、物の魂、（Spirit or Soul of a thing）. かすかな注入、一触れ［RA・五九八］。

（9） touch.（2）のトマスの文章参照。*OED* sb 18・19。二重の意味が含まれているが実は（8）と同義語［RA・同］。

（10） thy own image.「創世記」I・27「神は御自分の姿に人を創造された」［RA・同］。即ち「人間」のこと。

（11） the breath of God.「創世記」2・7「主なる神は土の塵で人を形づくり、その鼻孔に命の息を吹き込まれた、それで人は生きる魂を持つ者となった」［RA・同］。

（12） Whose hand...We plainly see, who made the same.「ローマ人への手紙」1・20「世界が創られた時から神に備わる目に見えないものは、被造物によってはっきり見られていたのであり、理解されるのです」［M・七四六］。

（13） a dark, AEgyptian border.「出エジプト記」10・21—22。主の指示に従ってモーセが天に手を差し伸べると、三日間エジプト全土が闇に覆われたことを指す［M・同］。

（14） this Veyle…［M・七四七］が言及した「コリント人への手紙」二、3・13—16に基づいて［F・二七七］は、このヴェイルを、古い契約が読まれる際に読む人々の心に掛ったままの覆いだと見ているが、［RA・五九九］はそれ

は誤解を招くと言う。このヴェイルの第一義は、原罪に纏わる、従って律法上の「体（からだ）」のことで、もっと適切な引用は「コリント人への手紙」一、11・24「これはあなた方のために裂かれた私の体である」と「ヘブライ人への手紙」10・20「覆い、つまり御自分の肉を通って私たちのために捧げて下さった新しい生きた道によって」である、と。

(15) This veyle…fractions spies.「コリント人への手紙」一、13・9―10「私たちは一部分を知り、預言するのも一部分だけだから。完全なものが来た時には一部分だけのものは廃れよう」と比較せよ［RA・同］。

(16) no Lilie.「雅歌」2・16「恋しいあの人は私のもの、そして私はあの人のもの、あの人は百合の中で群を飼っている」に言及。ヴォーンが『オリーヴ山』［M・一六一・一五］で引用している［M・七四七］。

「この歌の中でソロモンは…イエス・キリストの完璧な愛を描いている…そして忠実な魂、もしくは彼の教会を」（ロンドンで一六四九年に出版された或るバイブルの頭注）。この詩のこの最終行は、ヴォーンの謙虚の好例である。彼は自らを「忠実な魂」だと述べたりはしないのだ［RA・五九九］。

全詩行が八音節（二一九―三〇行目は九音節）でABABCCの型で押韻する六行詩八連から成る。

「恋煩い」とは無論、神へのそれだが、「鶏鳴」は神の降臨を告げるもの、神の象徴なのである。それは、暴風雨の試煉に遇いながらそれを凌いで早朝の歌を歌う鳥がいつの間にか光になってしまう次の作品が、標題は「鳥」でも、鳥が主題でないのと同じだ。結局はこれも神を、摂理を、讃える詩である。その作品と、その訳注（2）に比較を促されている、標題のない、というより、「ローマ人への手紙」の一節を標題にされている一篇を、続けてみてみよう。

鳥　The Bird

ここへ君はやって来る、忙（せわ）しい風が一晩中
君の宿を吹きまくった、そこでは君自らの暖かな翼が
枕だった。次々と不機嫌な暴風雨が
（それに一層相応しく生れついていそうなのは粗野な人間）(1)
　君の寝床と無害な
　頭に雨を降り注いだ。

そして今は　光のように瑞々しく陽気に

君の小さな心が　早朝の讃美歌を歌っている
あの〈**摂理**〉へ、その眼に見えない腕が
暴風雨を抑えつけ　君を十分に暖く包んでくれたので。
　　世にあるもの悉くが彼を讃え、教訓を
　　受けては教わっていた、最初に作られた時に。

それで丘陵や谷間はどっと歌い(2)
活潑に風や流れが走り回って話しかける間も
哀れにも石は言葉も舌も持たないが(3)
それでも石は深々と褒め讃えられるのだ。
こうして〈賞讃〉と〈祈り〉もここ〈太陽〉の下では(4)
それ程重要でない朝となる、偉大な事が為し遂げられる時
　にも。

何故なら包まれている〈精霊〉の各々は星であり
　　彼自身の小さな領野を照らしているのだから
その光は遠くから持って来られ借りられるのだが
　　朝と夕べを共々に　そこに生み出すのだ。

しかしこのような光の〈鳥たち〉が一つの土地を喜ばせて
各々の木でそれぞれの〈朝禱〉を厳かにさえずるように
夜陰に紛れて何か暗い家禽どもが
重苦しい鳴き声を立てて　聴く者全てを悲しませる。

　　すると〈雉鳩〉は〈棕櫚〉で悲し気に啼き(5)
　　かと思うと〈梟〉と〈サチュロス〉が遠吠
　　えする、
　　この楽しげな〈土地〉は硫黄になり
　　その流れは悉く汚れてゆく。

明るい輝きと浮き浮き気分、愛と信仰、全ては飛翔して
遂には〈昼間の泉〉が高みから再びどっと溢れ出す。(6)
［**M**・四九六―九七］

訳注

（1）course. ＝coarse［**F**・二八七］に拙訳は従った。
（2）ここからの四行、ヴォーンの詩「ローマ人への手紙」第八章第十九節［**M**・四三二］の第一連一〇行と比較せよ［**M**・七四八］。
（3）「**最後の審判**」［**M**・五三〇―三一］の一六行目「石とい

う石は言葉を持たないのに黙っていない」とその訳注（4）、及び「**イエス泣き賜う**」［**M**・五〇二―三］の訳注（3）［**小考**（六）21・30］参照。

（4）Praise and Prayer...when the great are done. ヴォーンと異なりダンとハーバートは、「被造物が祈る」という観念を拒否したようにみえる。ホウムズは言う、「彼らはどうしても我々に信じさせようとする、聖フランシスは小鳥、獣、石に説教したと、しかし我々にはどうしても信じられないのだ、あの小鳥、獣、石が聖フランシスと祈りを共にしたなどとは…あらゆるものの中で人間だけが神に語りかけられるのだ」［ダンの説教26・31ページ］。ハーバートは「摂理」"Providence"［四行詩三八連一五二行の詩、**W i L**・四一五―二七］の第三連「獣は喜んで歌い、鳥は己が調べに合わせて囀り／木々は天然のリュートに音を合わせて／御身を褒め讃える、しかし彼らの手や喉は／〈人間〉に任せる、自由がきかず音が出ないので」と詠う［**H E i**・四六］と［**R A**・六〇六―七］。

（5）ここからの四行、以下を参照。「イザヤ書」38・14「私は鳩のように呻いた」／「同」13・21「梟がそこに棲み、サチュロスがそこで踊る」／「創世記」19・24「主はソドムに雨を降らせ、ゴモラには硫黄と火を降らせた」。三〇行目は、ロトがよく潤っていた低地帯を選んだことを想起させる、「創世記」13・10［**R A**・六〇七］。

尚、サチュロスはギリシャ神話で酒神バッカスに従う半人半馬、時に山羊で表される森の神。

（6）Till the Day-spring breaks forth again from high.「ルカによる福音書」1・78「我らの神の優しい慈悲のお陰で高い所から〈昼間の泉〉が我らを訪れた」を参照［同］。

第一連は十音節四行に四音節二行、第二連は十音節四行に八音節二行、第三連は十音節六行、第四連は十音節と八音節が交互に四行、第五連は十音節四行、第六連は八音節と六音節が交互に四行、それを十音節の二行連句で締め括る総計三二行の詩。押韻構成は第一、二連が微妙に変化のあるＡＢＣＣＤＤの型、第三連も微妙に変化の付いたＡＢＡＢＣＣの型、第四、第六連はＡＢＡＢの型、第五連はＡＢＢＡの型で、全体で何だか鳥が羽搏いているような形態の作品である。

「ローマ人への手紙」第八章第十九節

創造された者たちは頭を上げて凝視めながら神の子の顕（あら）現（われ）を探しています。[1]

それで彼らはそうするのか？　彼らは全く〈感じ〉
ないのか〈感化力〉[2]は？
彼らは頭を持ち上げて期待し
呻くことも出来るのか？[3]何とまあ〈選ばれた人々〉[4]が
もうこれ以上何も出来ないのに、私の書物は言った[5]
彼らはすっかり鈍くなり死んだのだと、
私の書物は彼らを判断したのだ　意識がないと、彼らの状
態は
全く〈生気がない〉と。
始めよ始め、汝の表情を〈封印せ〉[6]よ、
そして汝の書物を燃やせ。

2

私は石であったら、木であったら[7]
あるいは純血種の花で
あるいは何か哀れな本街道筋の草とか　流れる
〈泉〉とか歌う小鳥であったら　よかったのに！
だったら私は（一つの確かな状態と結びついて）
日がな一日　我が日[8]を待ち望むことだろう
だが悲しいことに野放しのまま、うろつき回っており
眩暈（めまい）を引き起す突風が　どの道にも吹く、
おお　私をこのように彷徨わせないで下さい！
御身は変れないのです。

3

時々私は御身と一緒に坐るが　留まること
一時間かそこらすると　変化してゆく、
御身の他の〈被造物〉だとこういう〈状況〉では
御身を唯　目標とし、目指すものだ、
ある者は起き上って御身を探し求め　頭を
もたげて寝床から窺き見する、
別の者は、墓の中で生れて
子宮を去ることが出来ずに
そこで溜息をつき　呻き声を出す、御身を
自らの自由を　求めて。

4

おお　私にはせめてそれぐらいはさせて下さい！　彼らは
私が眠っている間　凝視めているのか行動するのか？
私は御身の慈悲を尚も悪用するのだろうか

幻想で、友人で、あるいは目新しい出来事[9]で？
おお　それには我慢しないで下さい！　御身の血は我がものにして
　我が魂は御身のものの筈、
おお　それには我慢しないで下さい！　どうして御身はやめるのですか
　驟雨をすっかり降らせた後で一雫（しずく）を？
　確かに、御身は目にして楽しまれるでしょう[10]
　　御身の羊が傍らにいるのを。
［**M**・四三二―三三］

訳注

（1）この引用はベザ（Theodorus Beza = Théodore de Bèze, 1519–1605）［ベーズ、フランスのプロテスタント神学者、宗教改革者］のラテン語訳だが、その翻訳のどの版にもこのままでは見当らず、一語付加された形でトマ・ヴォトロリエ（Thomas Vautrollier）の印刷した二つの版（ロンドン、一五七六、一五八二）にみられる［**F**・一八六］。欽定訳では「被造物は熱心に期待を込めて神の子の現れを待ち望んでいます」。

（2）Influence. この語は最初の詩集に収録した「彼から去ってしまったアモレットへ」“To Amoret gone from him”［**M**・八］の二〇行目に既に「感化力の緩やかな縁」として出てくる［**M**・七三五］。
　ここではおそらく古い占星術の意味で、星々が地上の物事に及ぼす影響力を指していよう。一種の地口もあり、ヴォーンは言っているようだ、「彼らは影響力を単に受け身で受け容れるだけではない、実際は積極的で外向性に富み向上心旺盛でもある」と［**RA**・五五七］。
　冒頭の二行、天上の支配力に従おうとは感じないのか、の意。尚、以下を参照。「**規則と教訓**」の一三―一六行［**小考**（五）2］「仲間たちと共に歩こう、心に留めよう、彼らの／間の静寂と囁きを…」。「**最後の審判**」一五―一六行［**小考**（六）20］「私の仲間たちもまた言う、〈**来て下さい**〉！と。／すると石という石は言葉を持たないのに黙っていない」。「**復活と不滅**」一九行以降［**小考**（三）23］「哀れにも、難儀な不平分子よ！このためだったのでは？／私が汝に　在るもの全てを教えたのは。／…」。「**復活前主日**」“Palm-Sunday”一一―一三行［**M**・五〇一―二］「本々、花々と香草、小鳥たち獣どもと石また石／それらは人間の堕落以来、呻きながら思っている／あの子羊に会えるものと」。「**鳥**」一三―一六行［本稿前出］。「**石**」一八―三六行［本稿後出］。［**M**・七三五］。

（3）「ローマ人への手紙」8・22「我らは知っています、今

日まで被造物は全て共に呻き、生みの苦しみを味っていることを」［F・一八六］。

（4）th' Elect. = the chosen.「ローマ人への手紙」8・29―30「神はまた前以って御存知だった者を御子の姿に似たものにしようと予め定められたのです、御子が多くの兄弟の中で長子となられるように。その上、神は予め定められた者を召し出して…」［RA・五五七］。

（5）my volumes...dead.「逍遥学派［アリストテレス学派］の人々は神を、生命を何ら吹き込むことなしに石と木材で建てる大工を見るように見る。しかし神の建て物であるこの世は、精神と核心と生活に充ちている」（Thomas Vaughan, *Anthroposophia Theomagica* の「著者から読者へ」）［RA・同］。

G・ハーバート「苦痛」㈠"Affliction"（I）［六行詩一一連計六六行の詩、WiL・一六〇―六八］の五五―六〇行「さあ私はここです、御身が私をどうなさるのか／私の書物は何も示してくれない／私は読み、溜息をつき、木であればいいと希う／それだったら確かに私は生長して／果実か陰になるだろう、少なくとも鳥たちの中には信頼して／私を塒にしてくれるものがあるだろうから私は正義でいられよう」を参照［M・七三五］。

（6）Seal up thy looks.「**隠された宝**」［本稿後出］の二九行目と比較せよ。鳥の眼の「瞼を縫う」'seel'のは、鷹狩りでの訓練操作の一部であった。瞼を頭の背後に結び付けた糸で縫ったのである。「封印する」'seal'は同音の'seel'を喚び出す［RA・五五七］。

（7）ここから一〇行の本質は、人間は生物の不動性を熟慮すべきというプラトンの『ティマエオス』を祖先とする生物について瞑想する伝統に固有のものである。これを天の本体には素より、それより卑小な生物にも当て嵌めるべきだというのがヴォーン特有の考えである［RA・五五七］。

G・ハーバート「苦痛」㈠の前掲部と共に、同人の「仕事」㈡"Employment"（II）［五行詩六連計三〇行の詩、WiL・二八四―八七］の二一―二五行「おお私はオレンジの木でありたい／あの忙しく働く植物で！／そうすればいつも実が一杯なって／決して望まなくてもすむ／彼に私の衣服となる果実になってほしいなどと」を参照［M・七三五］。

（8）my date.=the day of my death.「私の死ぬ日」［RA・五五七］

（9）newes. 拙訳「目新しい出来事」は、「この当時は〈新奇な事柄〉か、最新の出来事を報告するという現代の意味での〈ニュース〉かのいずれかを意味しそうだ」［RA・同］に拠った。

（10）Sure,...with thee. G・ハーバート「星」"The Starre"［四行詩八連計三二行の詩、WiL・二六七―七〇］の二九行

目「確かに御身は楽しまれよう、私を手に入れ賜いて」を参照［M・七三五］。

二行ずつ押韻する一〇行詩四連の作品で、音節数はどの連も順に8686868664である。

彼ら被造物が「そうする」（色々なことをする）のは「それで」なのか（And do they so ?）、即ち「神の子の顕現」を探しているからなのか？と始まるこの詩は、自分は神の傍に侍る羊だと言挙げする。

「**鶏鳴**」は夜明け時のものである。「私は確かに吟味し続ける」のは「**真夜中**」であり「私」が「貴重な夜」を希求・切望するのは「**夜**」［**小考**（七）34・39］であったが、そのような真夜中も夜も、毎日明けては昼間となる。夜明けの時は鶏鳴の時であると共にヴォーンの語り手にとっては、神が、「御身」が、「来られる」時に他ならない。夜明け時は「御身の偉大な日が〈突然出現〉する」時であり、それを「私」は凝視するのである、但し飽くまでも「我が道を行きながら」。

夜明け時　The Dawning

ああ！　何時（なんじ）に御身は来られるのか？　何時（いつ）あの叫び
〈花婿がやってくる！〉が　空に満ち渡るのだろうか？[1]
〈夕べ〉になって行きわたるのか
私たちの言葉と仕事が終った時に？
それとも御身の全く意外な光は[2]
　　真夜中にぱっと現れ出るのだろうか、
何時なのか　眠りか何か暗い楽しみが
狂った人間を際限なく支配するのは？
あるいはこの早朝の芳しい時間が
　　御身の小屋の錠を開けるのは？
そしてその光の薔薇色で御身の髪が
永遠の冠を戴いているのを暴くのは、
実のところ　その時だけなのだ
御身の栄光と最も美しく調和する時は
あらゆるものが今や活動し、野という野は
　　あふれんばかりに讃歌を生み、
〈被造物〉は悉く夜を振い落とし
そして御身の影を光が探し求め
星々は今や数限りなく消え失せ

眠そうな〈惑星〉は沈んでうとうとし
膨れ上った[3]〈雲〉はちぎれて散らばってゆき
全てが何か突発事態を期待し
一条の光線が勝ち誇ったりせず遠くから現れるのが
　　あの明けの明星[4]なのだ、

おお　一体どんな時に御身は
（私たちには分らないが）天国に跪かせるのか
そして御身の〈御使いたち〉を〈**前衛**[5]〉にして
哀れな軽率な人間を〈裁きに〉降りて来られるのか
たとえ、私が汚れた水のように
安全が〈損われた〉状態ではないにしろ
そこでは旅人が水を渇望しても
水は死んで墓場にいる始末、
ところがこの音立てやまない〈**泉**〉は
昼となく夜となく湧き続けて歌を歌い
ここで生れても知られるのは
他の所で　流れは汚れないままでいるが
それと同じように私の忙しい年月は
御身の自由な活動[6]におまかせするとしよう、
そして（ここに居る間）私はどうしても時々、
哀れな塵と〈交際〉しなければならないし
私の体は貧弱で劣ってはいてもその中を　これが
その〈水路〉を流れるように　流れなくてはならないが
それでも私の〈進路〉、私の目標、私の〈愛〉
そして主な知り合いは上方にあって欲しい、
そうすれば、あの、御身自らが〈太陽〉に
なる日と時間が訪れる時
御身は気付かれることだろう　私が衣装を正して我が道
　を行きながら
凝視めていることに　御身の偉大な日が〈突然出現（プレイク）〉す
　るのを。

［**M**・四五一―五二］

訳注

（1）「マタイによる福音書」25・6「真夜中に呼び声がした、見よ、花婿が来る、迎えに出なさいと」［**RA**・五七〇］。／そこでは呼び声は真夜中に生じた［**F**・二一一］。

（2）ペテット［**P**・一四三n］は、Giles Fletcherの「別の〈太陽〉が真夜中に昇るのを見る」と比較している。「**夜**」

の一二行目「真夜中に〈太陽〉と語り合ったのだ！」［**小考**（七）36］も参照［**RA**・五七一］。

（3）pursie=swollen, heavy, *OED* がこの意味でこの例を引用している［**F**・二一二］。

（4）That morning-star.「ヨハネの黙示録」22・16「私［イエス］は…輝く明けの明星である」［**RA**・五七一］。／「**受肉と、受難**」の六行目「明けの明星を埃で覆い隠すのは」［**小考**（五）14］。

（5）the *Van*. 明白な「前衛、先頭」の意の他に「山頂、峰」を意味するウェールズ語の Ban［女性名詞として定冠詞を伴って Fan へと語頭子音変化を起すケルト諸語にみられる現象。これはまた十七世紀にはしばしば発音されるとおりに Van, Vann と綴られた」へ作者は言及したつもりかも知れない、という示唆を紹介。ヴォーンは自宅から東方に山々を見ることが出来た。この種の地口はウェールズの詩の伝統に従ったものだったろう［**M**・七三九―四〇］。

（6）thy free services. 英国国教会共通祈祷書［the Book of Common Prayer］に「おお神様…御身の奉仕活動は全くの自由なのです」とある［**RA**・五七一］。

冒頭の一行が十音節、四音節が四行、後は全て八音節の二行連句計四八行の詩。

先刻の「ローマ人への手紙」の一節を標題とする作品では、語り手が自らを「御身の羊」だと締め括っていたが、「御身の驢馬」だと語り手が自己限定するのは前掲「**涙**」同様次の作品である。

驢馬　The Ass（1）

「マタイによる福音書」第二十一章（2）

御身！私を肉と血のこの忙（せわ）しい通りに
置き賜うた方、ここは二本の道が出遭う所、
〈**一方**〉は善と平和と生命（いのち）の道、
他方は死と罪と捨闘の道、
そこでは誘惑に弱い　目に見えるものが精神を支配し
今在る事物で人々がこの上なく親切だと判る、
そこではそこはかとない気苦労が**卑俗な**ものに打ち勝ち
輝かしい悪徳（3）が**偉大な**ものを破壊する、
御身は私に　律法ではあっても
完全な自由（4）をもたらすものを定めて下さったので、
それは私をうんざりさせず蝕みもしない

〈**枕**〉であって〈**重荷**〉ではない、
だから私に、いつまでも安らげる　しかもこの上ない
もの故なお更頼れる恩寵をお与え下さい
私の眼にも足にも動くよう教えて下さい
御身の愛によって定められた限界内を、
もしも私が穏やかで慎しく
眼に見えない物事を気遣うなら
私を信仰に結びつけて下さい、理由は分らないのに
力に疑義を挟む人々が不信を表明するにしろ、
御身の〈驢馬〉[5]たる私を唯、賢くして[6]
神秘を　探索するのではなく担わせて下さい、
御身を運ぶ者は御身によって導かれ、
議論する者は自らの頭に従うのだ。
悪い動きを抑えるために　私を静かに
死者たちの間に置いて下さい、そこでは勢いよく悪が
彼が自慢せず征服しなくても　繁栄しており、
真理が（ここで虐げられていたのだ）賞を得る。
何時如何なる時に、私が何をしようとも
私に必ず問題にさせて下さい、誰が
協力してその**行為**に　私を向かわせるのかと。
御身でない場合にも私にそれをやらせないで下さい。
何にもまして私に貧しい人々を愛させ
あの重荷を裕福な人々の戸口に運ばせて下さい、
私にそれを褒め讃えさせ、親切にさせて下さい
下層の人々に、粗野な心の人々に。
もし世の中が私に御身の書物によって探求される
わけにはいかないものを何か差し出したり
あるいはそれが法には適っていなければならないが
御身のなさり方に不都合だと判るものだったりするなら
そういう危険を避けるために御身の恩寵を
私に下しおかれてその場から遠ざけて下さい。
依然として御身に喜んでいただけるように私を賢くして
人々には何とでも好きなように私を呼ばせて下さい。
　こうして御身の穏やかな指図する手のままに
御身の哀れな**ロバの子**が御身の意に副う時、
荒野で生れ育った彼が賢くなって
あの　人間が最も讃えるものを最も軽んずる時、
この地上の物が悉く薊になって
彼の唇をちくちくと刺し　遂には彼が嘆き悲しんで
気落ちして〈子羊〉が行き交う

あの生命の牧場を熱望する時、
おお　その時は、正にその時こそ！断ち切るか解(ほど)くのだ
こういう束縛を、この悲しい従属を
この鉛の状態を、それを人間は　存在にして
生命(いのち)だと呼び違えて　すっかり奴隷になってしまう。
だから（おお〈神〉様！）〈驢馬〉が自由にされ[7]
御身にしか知られていない状態になる時、
おお　彼を彼の〈主〉によって導かれるがままにして
ふつふつ湧き出す泉に向かわせ、そこで養われるように
して下さい、そこでは光、歓び、健康、そして申し分ない
平和があらゆる苦痛と病気という病気を閉め出しており
死と欠陥は忘れ去られ
一度は砕かれた骨も　喜び躍るのだ！[8]

［M・五一八―一九］

訳注

（1）『オリーヴ山』の「聖体拝領前の瞑想」［M・一六二・一〇―一四］の中に、ロバに乗って幸福を振りまく〈主〉の姿が現れている。
ジャドソン（Alexander C. Judson［*M.L.N*, xli,（1926）178–81］）は言う、ヴォーンは、コルネリウス・アグリッパの一文（Cornelius Agrippa, 'Ad Encomium Asini Digressio' in *De Incertitudine et Vanitate Omnium Scientiarum et Artium*）を念頭に置いたかも知れないと。
アレン（Don C. Allen［*M. L. N.*, lviii,（1943）612–14］）は別の例を挙げて示唆する、ヴォーンは誰か特定の著者にではなく、おそらく通常の伝統に従っているのだろうと［M・七五〇］。

（2）第一―一一節。ロバに乗ってエルサレムに入ってゆくキリストについて語られる［F・三一八］。

（3）splendid vice. 鮮やかな撞着語法。ヴォーンは多用する。

（4）「ヤコブの手紙」I・25「しかし自由をもたらす完全な律法を見詰め、それを守り続ける人は聞いても忘れる人ではなく行う人なので、このような人はその行いによって幸せになる」［F・三一八］。

（5）ヴォーンの「涙」"Tears"一一行目には「御身の哀れな〈ロバ〉」'tyh poor Ass' と出てくる［本稿前掲］。

（6）wise...mysteries. エラスムスの『金言』*Adagia* 2204の「神秘を運ぶロバ」"Asinus mysteria portans" と、『イソップ物語』二六六「神像を運ぶロバ」［自らの運ぶ神像を人々が拝むのに、それを自分が拝まれていると思って有頂天になるロバの話］、及び、ホールの『瞑想』（Joseph Hall, *Meditations*, iii 63）の「エジプトの女神を運ぶロバは多く

の者に膝を屈しさせたが、それはその獣にではなくその重荷に対してであった」を参照［M・七五〇］。

（7）「ヨブ記」39・5［M・七五〇］。「誰が野生のロバを自由にし、野生のロバの縛めを解き放ったか」、荒野をその家にし不毛の地をその住み処にしたのは私［神］だと続く。

（8）And bones rejoyce, which once were broken! 下線森田。頭韻と中間での擬似韻に注目。ヴォーンの頻用技法の一。／「詩篇」51・8「喜び楽しむ声を私に聞かせて下さい、御身が砕かれたこの骨が喜び躍るように」［RA・六二五］。

音節数は一行目10、最終行9、他は全て8の二行連句（二行ずつ押韻する）計六四行の力作。

この詩の標題は、その内容が端的に示すように、〈主〉に真向う語り手の「私」、という意味であった。

動物の対蹠物としてのように無生物の代表の如く、同じ第二部の、真中辺り、「**驢馬**」の三篇前に、「**石**」と題する作品がある。因に、驢馬も石も、象徴辞典の類ではその説明に最も多くの場所が与えられる項目に属する［deV・二六―二九、四四三―四五］。

石　The Stone

「ヨシュア記」第二十四章第二十七節[1]

　　私は今それを持っている、[2]
しかしどこで行動すべきか　それは誰も知らない
どこに私が恐れる理由があるのか
　　眼や耳を、
　　何を人間は示せばよいのか？
もしも夜や陰や秘密の部屋部屋が
　　墓のように沈黙して
私の暗い意図を隠さず　承認も
しないなら、私はどうすればよいのか？
男なら買収できるし、女は
実入りのある罪悪は承諾する、
しかしこういう物言わぬ被造物は甚だ誠実だから
黄金も贈物も彼らを服従させられない。
垣に耳あり、と古い**真実**は言った、
だからどの茂みも何かの潜む小屋だ[3]　と、
この用心深い愚か者共は思い違いをして　人間しか
恐れないのだ、そこに待ち伏せされながら。

しかし私は（ああ！）
ある日見慣れない鏡の中に見せられたのだ
眼には見えないが〈神〉とその〈被造物たち〉との
間に忙(せわ)しくやりとりされるあの交流を。

彼らは聞き、見、話して
どっと声高い発見に到るのだ、
血のように声高かに。[4]〈神〉が情報を必要と
しているからではない、地獄とあらゆる心が
素裸(はだか)で　眼前に姿をみせているのに
己が霊にて全ての物に生命を付与し育むからだ。
だから[5]聞き取るとおりに判断し
何者をも咎め立てない御方が　公正な
道を進まれるので、人間の行うことは全て
隠れるか顕れるかだとは御存知ながら
その方(かた)は御自身の光によって
（全てを見通し　全てが正しいのだが）
人々を非難せず、試そうとなさるのだ
人間自身の眼さえ正しいと　どうしても
認めようとする過程によって。
それ故　砂と塵(ダスト)が
証拠を求めて払い落とされ　死んだと
思っている人もいる石が　たちまち
証言の一声を挙げて　暴き出すのだ
我らがおよそ思いもしなかったあの密かな罪を。
だから弁えることだ、放埒な人々よ、君たちが誤る時は
事物はどれも〈筆記者〉と〈記録簿〉になり
己の〈主〉に従って
君たちの最も個人内密の罪障を記録するのだと。

〈**律法**〉が〈**イスラエルの民**〉に告示された、
この民は多くを約束しながらそれを果すのは
拒んだのだったが、その同じ行為に対して
彼らに一個の**石**によって訴訟が起されるだろう、
その内容で、十分厳しいものだが、
彼らの心が更に堅く一徹だと判明するだろう。
しかし今や〈神〉が　あらゆる人類が決して
耐えられそうにないものを引き受け賜うたのだから
もし幾らかでも（というのも彼は全てを招くのだから）

彼の緩い軛を拒んだり軽んずれば
〈福音〉が（世界を裁くのは
彼の言葉であって彼自身[6]ではないのだから）
紛々の〈塵〉によってそのような人間を糾弾する、
塵よりもっと粗悪な無益なものだとして。

［M・五一四―一六］

訳注

（1）〈主〉の僕であるモーセの死後、〈主〉によってモーセの後継者とされたヨシュアは、シケム［古代サマリア付近の町］で民と契約を結び、彼らのために掟と法とを定め、大きな石を取り上げて〈主〉の聖所の傍らに立つテレビンの木の下に立てる。「そしてヨシュアは民全員に告げた、見よ、この石が私たちに対する証拠となる。それは主が私たちに語られた仰せの悉くを聞いているのだから。それ故この石は、あなた方があなた方の神を拒絶したりしないように、あなた方に対する証拠となる」。

（2）I have it now. 私は今それを理解している、分った、の意。一人称は劇的な工夫で、ヴォーンは何をすべきか、それをどのようにするかは決めている罪人、もしくは法律違反者を装っている。問題は二行目に述べられる、どこで行動すべきかである［RA・六二三］。

（3）G. L. Apperson, *English Proverbs and Proverbial Phrases : a Historical Dictionary* (London, 1929) p. 296. 参照。「垣根に眼（もしくは）耳あり」。そこには茂みの中に見られる物（熊や盗人）を扱っている諺が幾つかある［F・三一三］。

（4）「創世記」4・10では、アベルの血が土の中から呼びかける、と言われている［F・三一四］。

（5）一六五五年版には＊印でヴォーンの自注、「ヨハネによる福音書」5・30、45とある。30「私は自分自身では何も出来ない。聞くがままに裁く、私の裁きは正しい、私は自分の意志ではなく私をお遣わしになった父の意志を求めようとするのだから」、40「私が父にあなたたちを訴えるなどと思ってはならない、あなたたちを訴えるのは、何とあなたたちが信頼しているモーセなのだ」。

（6）＊印でヴォーンの自注がある、「ヨハネによる福音書」12・47、48。「私の言葉を聞いてそれを信じない者がいても、私はその者を裁きはしない。私は世を裁くためではなく、世を救うために来たのだから。私を拒み私の言葉を受け入れない者にはその者を裁く者がいる。私の語った言葉そのものが、その者を最後の日に裁く」。

AABBAと押韻する最初の五行以降は二行連句で、四

音節七行、八音節五二行の計五九行の力作。〈石〉は、既にみた「**鳥**」や「ローマ人への手紙」8・19に先導される作品だけでなく、「**最後の審判**」や「**復活前主日**」［**小考**（十六）21］などに現われる。バイブルには〈石〉は、新・旧訳合わせて複数形共々三六一回出てくるものなのである。

類題とその関連題の作品を概観しながら標題を眺めていると、この詩集の第一部に、ある流れが浮上するようだ。語り手はある時、気を散らされて「**混乱**」し、「ローマ人への手紙」8・19の作品［本稿既出］で神の子の顕現を探して「**逆戻り**」［本稿同］し、「**決意**」して「**悔い改め**」、「**信仰**」へと向かい、「**夜明け時**」［本稿同］で神に接近して「**反抗**」し、「**悲惨**」［本稿同］を経験し、第一部掉尾の「**懇願**」［**小考**（十六）27―28］に到る、という流れである。

以下、今挙げた新たな標題の作品五篇をみてみよう。

混乱　Distraction

おお　私を結んで下さい、粉々に崩れたこの塵（ダスト）を！　その
　堆積はすっかりちりぢりになり取るに足りません
　一握りに対してお与え下さい、唯、思慮を
　　そうすればそれは購われます、
　　もし御身が
私を星に　真珠に　あるいは虹に[1]して下さっていたら
　私がその時射込んだ光線は
　私の光を減らさなかった筈です
　　でも今
私は我が身が前より小さくなっていると気付くのです、
大きく成長すればする程、
　　世界は
声々で満ちています、〈人間〉は呼びかけられ放り出されます[2]
　一声ごとに、そして全てに答え、
　あらゆる調子を知って叫ぶのです、
　　それ故　依然として
生き生きとした耄碌が誘惑するか、年寄りが彼の意志を奪い取るのです
それでももし御身が私の翼を切り取って、と言っても〈柩に収められ〉て
　このように活気づいた罪の塊となった時だが

あの、惜し気もなく御身がその時与え賜うた
　光を　保存されたなら
　　ほっとして思うのだが
私は挑ねつけていただろう、それで言ったのです　御身が
　控えられたのだと
　　そうでなければ御身の蓄えが減ったのだと
　　しかし今では御身が甚だしく
　　祝福して下さったので
私は、何たること！嘆き悲しむのです　御身が私をそうな
　さったのだと。
　　私が嘆き悲しむ？
おお、そうです！御身は　私が嘆き悲しむことを御存知で
　す〈来〉て解放して
　　服従させ鎮めて下さい　御身の光で、
　　立ち昇って私の視力を霞ませそうな塵(ダスト)(3)を、
　　余りにも長く独りぼっちに放っておかれて
　　騒音と群衆の中で
　　圧倒された私が
少しずつ死なせることで全体を救い出そうと骨折ったりし
　ないように。

［M・四一三］

訳注

（1）　G・ハーバートの「朝の礼拝式」“Mattens”［四行詩五連計二〇行の詩、WiL・二二五―二八］の五―七行目「我が神様、心とは何ですか？／銀か金か貴金石か／星か虹か…」を参照［M・七三一］。

（2）　G・ハーバートの「最後の審判の日」“Dooms-day”［六行詩五連計三〇行の詩、WiL・六五〇―五三］の二七―二八行目「人間は秩序から放り出されて／全世界に配分される」を参照［同］。

「嵐」の訳注（2）［小考（七）19］も参照。

（3）　本稿前出「引退」の注（9）参照。

二行連句三四行の作品で、十音節一〇行、八音節四行、六音節一〇行、四音節三行、二音節七行で、行頭に出入りがある。混乱の余り語り手は、来て解放して服従させ鎮めてくれと神に希う。混乱した心を示す内容をよく表しているような詩型でもある。

決意　The Resolve

私はそれをずっと考えてきた、それで気付いている[1]
　　更に長く留まるのは
怠慢を大目にみられているにすぎないのだと。ある小道を
　　心にかけながら別の
小道に彷徨い込むか　どの小道にも赴かないことは
　　愛にはなれない、
その旅人が家に帰ってくる時には
　　それは動かないのだろうか？
もし汝がそちらへ行ってぐずぐずせず
　　その場所にしがみつき[2]
若さと美にいずれも朽ちざるを得ないのだと告げても[3]
　　それらは一つの〈**偶然**（ケース）〉にすぎない、
弛んだ区分けされた心は　凍りつくだろう、〈太陽〉も
　　髪をばらばらにされては
めったに暖められないが、収縮することで[4]
　　岩々を熱することが出来る、
汝の〈**諸力**〉を呼び込もう、走って辿りつこう
　　光を備えた家庭に、
そこに居よう、影が伸びて[5]
　　夜を〈**引き延ば**[6]〉さないうちに、
もうこれ以上〈**叫び**[7]〉に従わないでおこう、在るのは
　　昔からの道で
すっかり花々が撒き散らされており〈**五月**〉のように[8]
　　幸福で瑞々しい、
そこで向きを変え、それ以上は変えないでおこう、才士たち
　　微笑ませよう　公正な眼に
あるいは唇に向かって、〈しかし〉泣きながらそこに坐っている者は
　　〈**褒賞**[9]〉を得ているのだ。

［**M**・四三四］

訳注

（1）I have consider'd it; and find. G・ハーバート「報復」"The Reprisall"［四行詩四連計一六行の詩、**W i L**・一一六―一八］の第一行と全く同じ（そこでは語り手が考えてきたのは、キリストの受難に応えて何をすればよいのかということ、**W i L**・一一七）［**M**・七三五］。

（2）Catch at the place, G・ハーバート「苦痛」㈠"Affliction"（I）［六行詩一一連計六六行の詩、**W i L**・一六〇―六八］の一七行目「それ故わが突然の魂はその場所にしがみ

ついた」と比較［**RA**・五五八］。

（3） Tell youth...*Prize*. この一一行目以降最後までは *Witt's Recreations* の最終ページと一六五四、六三、六七年版にも印刷されていて、それがその本の結論になっている。「こうして汝の若々しい熱狂にこういう〈若書きの幻想〉を供給してきたのだから汝に（私自身にも）**もっと高度な物を求める**と歌って欲しいものだ、そしてこれで汝の気高い決心に応えるために私は汝のこの上なく鋭い見解と真摯な考察に委ねよう、『火花散る燧石』と題するヘンリー・ヴォーン氏の見事な天上の聖なる詩集を」［**M**・七三五］。

（4） by contraction...rocks. 収縮された光は岩さえ貫ける［**RA**・五五八］。

（5） before...night. Benlowes, *Theophilia*（1652）ii. 48. 1「太陽の長い影が夜を引き延ばさないうちに」と比較［**M**・七三六］。

（6） *Span* up. この句を譬喩に使って、引き延ばす、ぴんときゅっと張る、の意に用いる説明として *OED* はこの箇処を引用する［**F**・一八九］。

（7） *Cry*. 軽蔑に用いて「（人々の）群」、「狩猟の際の犬の叫び」。ヴォーンは「群衆と同調するな」と言っている。「**混乱**」［本稿前出］の一一―一二行目「世界は／声々に充ちている」ことを明らかにしている［**RA**・五五九］。

（8） All strewed...as *May*. G・ハーバート「苦痛」（一）の二一―二二行目「私の日々に花々と幸福が撒きちらされていた／〈五月〉ほどの月は他にはなかった」と比較［**M**・七三六］。

（9） the *Prize*.「詩篇」73・25「御身以外に天で私に誰がいてくれるでしょうか？地上では御身の他に私が望む人は誰もいないのだから」。「**イエス泣き賜う**」(五)Bの最後に付加されている［**小考**（六）32］。イエスが側にいてくれる、救われている、の意。

八音節の奇数行同士、四音節の偶数行同士が一対ずつ順に押韻してゆく二八行の作品だが、後半の始まる一五行目は七音節、一六行目は三音節で変化がつけられている。

世俗の安易な小道に迷い込まずに神を〈愛〉し神からの〈愛〉を求めて、昔ながらの道に踏み留まろうという〈決意〉である。そして〈悔い改め〉ようとする。

悔い改め　Repentance

〈主〉よ、御身が　この値打乏しい〈土（クレイ）〉に
　　あの神聖な〈光線〉を

御身の霊を　植えて下さり、全体を
あの　穀物の〈注ぎ込んだ〉富で活気づけて下さったので
私の身体(からだ)は前へと忍び寄ってゆき　巧みにこっそり[1]
成長と力を手に入れたのです、〈調べながらです〉御身の
健康と熱を、〈あの〉小さな門と
狭い道を、そこを通って御身へと到る
あの〈通路〉を、〈彼〉[2]が〈隷属〉への
鉄格子で〈入口〉だと名付けたものを、
御身の律法だが網であり、それに何羽かの小鳥は
（たまにではあるがそれでも）捕われたし
御身の〈約束〉ではあるが空虚な言葉であり
〈子供たち〉以外誰も聞かず教わりもしないものでした。
これを私は信じたのです、〈すると〉友人[3]が一人
遠方からしばしばやってきては〈**駄目だよ**〉と囁いたが、
それでも私の目的には合わないものの
私は自分の敵にすっかり耳を傾けました。
そのため悲嘆に貫かれて　私の悲しくも
誘惑に負けた魂が　御身に溜息を漏らすのです、
真実の光を身に〈纏って〉
あらゆる事柄を正にあるがままに御覧になる御身に。

御身の王座から見て下さい　この〈一連〉の
重い罪業を、私の酷い背信を、
それを私は魂の全てを込めて〈告白します〉、
〈神〉様、私の〈告白〉を〈受け容れ〉て下さい。
　　それは最後の日でした
（私独自の罪に触れて）
私は一人坐って飲んでいました
　　その苦い〈一杯(カップ)〉を、
御身の美しい多様な蓄えの全てから
私の得点を打ち負かしそうな[4]ものを探し求めて。
　草の刀身状の葉、御身の〈被造物〉の牧草地、
　木々とその葉、花々、その結んだ種子、
　私がその一部である〈塵(ダスト)〉、
　私の心より遥かに柔らかい〈石また石〉、
　雨の雫、風の囁き
　私には全く見えない〈星々〉、
　御身の香草が夜ごと飲み込む〈露〉、
　それらが光の中で暖まるのに浴びる光の束、
　特徴[5]ないし生命を持つもの全てを
　私は呼び出してこの相剋に決着をつけようとしました

そして〈滞納金〉用に不足が生じないように
泉が流れていたので私は泉に涙を告げました
しかしこれらが秤にかけられると
私の罪だけがそれら全てより重かったのです。[6]
おお　我が尊い〈神〉様！　我が生命（いのち）よ、我が愛よ！
この上なく祝福された子羊！　限りなく穏やかな鳩よ！
御身の　罪を悔いている〈違反者〉を許して下さい。
そして彼の罪をもうこれを限りにお忘れ下さい、
これらの死の陰を追い散らして私の魂に
生きてゆけるように　光をお与え下さい、
私を切り棄てないで下さい　我が背信[7]のゆえに
故意の反逆、隠蔽のゆえに、そして
それらそれぞれの流れの中にいるものにお与え下さい
我が〈救世主〉の心の中に水源がある一部を。[8]
〈主〉よ、私は忌まわしい得点を告白します
願わくは私はもうこれ以上そうしないでいたい、
尤もそれでも私はどの罪びとにもまさる罪びとだが
おお　これについて考えよう、**御身の〈息子〉は確かに血を流したのだ**と、
おお　思い起こそう　彼の傷を、彼の難儀を、
彼の〈苦痛〉と血塗（まみ）れの苦悶を、
それから御身の造り賜うたあらゆるものを、
そして注目してみよう　それらがどのように失敗し消え去
ったかに、
天国そのものが[9]公正で輝いていても
御身の視野ではどれほど暗くて汚れているかに、
ではどうすれば御身と共に、人間は神聖にな〈れる〉のか
御身の〈御使い方〉を愚かに振る舞うなどと非難[10]しながら。
おお　私は何者なのか、茨に無花果[11]を
育て　雑草に花を咲かせるとは！
私は　夜のうちに成長し朝には消え去る
罪と悲しみの瓢箪[12]だ、
生と死のこのあらゆる〈**過程**〉では
私の呼吸ほど忌まわしいものはない
冒瀆は我が舌に安らぎ[13]
欠陥と暗闇は我が胸に
汚染は私の身体中に混り合い
御身への私の魂さえ死んでしまい
私が祝宴にあずかる彼の中でのみ
魂と身体の双方は十分に衣服を纏えるのだ、

彼の紛れもなき完璧が全てを御破算にして
彼の貧しい者たちの〈箱〉を充たすのだ、[14]
彼は長い生命と光の〈中心〉であり
私は有限にすぎず、〈彼の方〉は〈無限な〉のだ。
おお　だから御身の〈**正義**〉を彼の中に〈閉じ込〉めて
彼の長所によって御身の慈悲を私のものにして下さい！
［M・四四八―五〇］

訳注

（1）ここからの五行には、G・ハーバート「聖なる洗礼」(二) "Holy Baptism"(II)［五行詩三連計一五行の詩、WiL・一五二―五四］の一―三行目「〈主〉よ、御身への狭い道と小さな門が／通路の全てで…」との照応が幾つか（例えば七―九行目など）ある［RA・五六九］。

（2）He.=my flesh（五行目の）私の身体［M・七三九］。

（3）a friend...from far. 彼を護る天使か？［RA・五六九］。

（4）outvie my score.=exceed my debt. 私の負債を上回る［F・二〇七］。

（5）signature. ヴォーンの散文 *Hermetical Physick* の中の一節［M・五八三・一一―一三］「〈神〉が意志を通じて自らの〈被造物〉に印をつけるあの印象と特徴…」を参照［M・七三九］。

（6）彼の罪のほうが神にとって一層重要だという意だろう。自然は人間を必要とする、神の息子たちの顕れを待っているから（「ローマ人への手紙」8・19）［RA・五六九］。

（7）Cut me not off for my transgressions. G・ハーバートの同題の作品"Repentance"［六行詩六連計三六行の詩、WiL・一六八―七二］の一五行目に殆ど全く同じ一行 'Cut... my most foul transgression'［最上級付き単数、下線森田］がある［RA・同］。

（8）この詩集の他の詩「**祝祭**」"The Feast"［M・五三五・三一―六］「彼の祝福された心の中の／確かな一部／である井戸、そこで生き生きと水が湧いて／それで養われるので／哀れな塵は死んでいても／再び起き上り生きて歌うのだ」参照［M・七三九］。

（9）「ヨブ記」25・5「月でさえ見てごらん、輝かないし、全く、星々も神の視野では清らかでない」［RA・五六九］。

（10）「ヨブ記」4・18「神はその僕たちを信頼せず、御使いたちを愚かに振舞うと非難する」［F・二〇八］。

（11）Figs...weed.「マタイによる福音書」7・16「茨から葡萄が、薊から無花果が採れるだろうか」［RA・五六九］。「ルカによる福音書」6・44「茨から無花果は採れないし、野薔薇から葡萄は集められない」［F・二〇八］。

（12）gourd...to morrow.「ヨナ書」4・6―10「ヨナに陰を

作ってやろうとして神はトウゴマノキ（gourd）をあたえたが、それは翌日には萎びてしまった」及び、ヴォーンの散文『パウリヌスの生涯』の「読者へ」［M・三三八・一〇］中の一文「もはや萎び腐った〈瓢箪〉をむやみに愛しむな」を参照［M・七三九］。

（13）Profanenes...brest. G・ハーバート「アーロン［モーセの兄でヘブライ人の最初の大司祭］」“Aaron”［五行詩五連計二五行の詩、WiL・六〇〇―三］の六―七行目「冒瀆は私の頭に／欠陥と暗闇は私の胸に」［同］。

（14）fills the Boxes...poor. G・ハーバート「賞讃」（三）“Praise”（III）［六行詩七連計四二行の詩、WiL・五四二―四五］の二八行目「（私たちは貧しい人々のために箱を持っているので）」［RA・五七〇］。

二行連句（二行ずつ押韻する）の全八六行の力作で、音節数は三行が4、一三行が9、六行が10、残り六四行が8。〈悔い改め〉て〈信仰〉に到ることになる。

信仰　Faith

明るく尊い光線！　その強力な投射は
　全てのものに平等で
意気消沈したものにも到り着く
　昂揚たる士気の素晴らしいものにと同様に、
どのようにして我が〈神〉は汝を放射して
　己が伴侶[1]を拡大なさり
個人の家庭を公開の
　家になさったのか？
全ては今や〈共同法定相続人〉[2]になりそうだ、〈**奴隷**〉か
　〈**自由の**〉[3]身かという如何なる騒音も
私たちにあの、御身に伴う〈喜び〉を
　〈禁ずる〉わけにはいかないのだ、
〈律法〉と〈儀式の数々〉が作り出した
　栄光に満ちた夜にあっては
〈星々〉と〈雲〉が、光と陰の両方が
　同等の権利を備えていた、
しかし、自然界で昼間に
　なって夜が休憩すると
星々が店を閉め切り　靄が急ぎ立ち去り
　〈月〉が悼み嘆くように
正義の〈太陽〉[4]が

一たび姿を現すと
あの〈場面〉は一変して　新しい衣装が
ここにいる私たちに残されて
覆いは無用となり　〈祭壇〉は崩壊して[5]
煙れる火は死に絶える、
そして全てあの神聖な壮麗さと事物の
抜け殻は飛び去ったのだ、
すると彼が輝き出て　その悲しい堕落と
厳しい闘いが
あの不可思議な〈雲のかかった〉〈典礼〉の
形で表されることになった
そして天然の〈太陽〉の中に以下の三つ、
〈**光**〉、**動き**、**熱**[6]があるように
今や〈**信仰**〉、〈**希望**〉、〈**慈悲**〉が
彼によって〈完璧〉となる、
信仰は広げ延ばすのだ　至福[7]を、罪と死が
私たちからすっかり引き離すものを、
私たちがそれを求めて息を切らして走ったりしないように
信仰は私たちに家庭を恵んでくれる
私がもうこれ以上は必要としなくなり、こう言うように
私は確かに信じます　と、
そして私の愛してやまない〈主〉が真直ぐに
答えて下さるように　〈**生きよ**〉と。
［**M**・四五〇―五一］

訳注

（1）his spouse.＝The Church.［**F**・二一〇］。神の配偶者とは教会を指す。

（2）Co-heirs.「エフェソ人への手紙」3・6「異邦人が福音によって、キリストにおいて約束されたものを頒かち合う者、仲間として相続する者、同じ体に属する者になるということです」／「ローマ人への手紙」8・17「もし子供であるなら相続人です、神の相続人、そしてキリストと共同の相続人です、もしそうならキリストと共に苦しめば私たちもその栄光を共にすることになります」［**F**・二一〇］。

（3）Of *Bond*, or *Free*.「コリント人への手紙」一、2・13「一つの霊によって私たちは皆洗礼を受けて一つの体になるのです、ユダヤ人であれギリシャ人であれ奴隷であれ自由の身であれ」／「ガラテヤ人への手紙」3・28「そこではユダヤ人もギリシャ人もなく奴隷も自由な身もなく男も女もありません、あなたがた皆キリストイエスにおいて一つだからです」［**F**・同］。

（4）Sun of righteousness. キリストを指す。「マラキ書」4・2「しかし我が名を畏れるあなたたちには正義の太陽が 昇る翼に癒す力を備えて」［**RA**・五七〇］。
（5）Veiles…useles, Altars…こうして旧約の宗教上の実践は破棄された［同］。
（6）*Light, motion, heat.*「**嵐**」の三二行目にヴォーンの自注で同じ三語が添えられている、その訳注（8）共々［**小考**（七）・20］参照。
（7）Faith spans up blisse.「**決意**」“Resolve”の二〇行目「夜を引き延ばす」‘*Span* up night’とその訳注（6）［本稿前出］参照［**RA**・五七〇。］

八音節の奇数行同士と四音節の偶数行同士が一対ずつ押韻してゆく四四行の作品。

そして、先刻見たように〈夜明け時〉に神の姿は見るが、そうなると、〈反抗〉心がむらむらと湧き上る。

反抗　The Mutinie

この同じ〈土（クレイ）〉[1]と藁にうんざりして、私は
横たわって息をつき、心の中に
後の重荷とこれから来る筈の悲嘆を投げ込んだ、
　　そのずっしりした総量は
甚だ私の胸を揺ったので（痛み傷んで意気阻喪して）
私の思考は石などから飛び出す水のように
騒立つ〈経路〉から放れて堤へと退いたが
そこでは境界で暴風となって荒れ狂い、悲痛の余り
ぶつくさ言った。しかし私は思考が沸騰するのを感じ
　　その〈騒動〉[2]を知っているので
彼に注意を向けたが、彼は哀れな砂を疲れさせ
高慢な波を服従させた[3]、〈たとえ〉それでもこれら不毛の
　　土地と乾ききった煉瓦が（と私は言った）
　　私の仕事であり〈運命〉の筈だとしても、

2

私に戦い捨闘させて下さい　御身の敵共と
〈御身のだけではなく私の敵でもある〉なにしろ彼らの
〈技術（アーツ）〉と力が悉くあの高みへと積み上げられる時は
　　〈バベル〉の重さ[4]は
御身の栄光と彼らの恥辱を証明することになるのだから、
だから私を御身に〈近付け〉結びつけて下さい、この罪と

死の谷間に私は逗留してはいても　それでも〈眼〉は
仰ぎ見るのです御身を　私の信仰[5]の〈創始者〉にして
完成者である御身〈を〉、だから私にお示し下さい
　上を下をと飛び回る
この泡と泡立つ騒音の悉くが
私の〈眼〉や〈耳〉には宿ったりしない家を、
　おお　それら悉くを封印して下さい！　それらが
　他の嵐のように飛び回れるように。

3

私は知らないのではない　御身には更に短い〈近道〉が
あるのを　私を家へ導くのに、荒野、〈海〉あるいは
〈砂地（サンド）〉や〈蛇（サーペンツ）[6]〉を通り抜けなくても、それでも御身は
　（御身の言葉が示すように）
この沙漠に私がすっかり閉じ込められていても
そこにいる私に光を与え　私を腐敗させない
よう矯正して導き賜うので、おお　喜び勇んで
私は歩みを定めよう、そしてどのような小径を
御身の神聖にして永遠なる意志が　御身の
　傷ついた葦[7]に定められようと
おお　それを十分に服従させて下さい　そのように
我が持つ全てを所有すれば　私は御身を怒らせもせず
　御身の〈鳩〉を悲しませもせずに優しく穏やかに
　生かしも死なせもするのです　御身の〈子〉を。

「ヨハネの黙示録」第二章第十七節[8]

勝利する者には私は食べられるように隠されていたマンナを与えよう、また私は白い小石を与えよう、その小石にはそれを受ける者以外には誰にも分らない新しい名が記されている。

［M・四六八―六九］

訳注

（1）この詩の心象は、主としてエジプトでのイスラエル人の、「出エジプト記」1―14に語られるような、「粘土捏ね、煉瓦焼きの」'in mortar, and in brick' 苦役の物語に由来する［M・七四三］。

（2）Coyl. = tumult, turmoil［RA・五八一］。この語には別に「とぐろを巻く」意があるが、第三連の「蛇」との縁語になる。

（3）G・ハーバート「摂理」"Providence"［四行詩三八連計

一五二行の詩、**WiL**・四一五―二七」の四七―四八行目「汝は哀れな砂に／誇り高い海を阻止させた、膨れ上って集まる時でさえ」、及び、ヴォーンの「**暴風雨**」［の訳注（1）**小考**（七）16］参照［**M**・七四三］。

（4）Babel-weight.「創世記」11・1―9。ノアの大洪水の後、シナルの古都バベルで人々が天に届く〈バベルの塔〉を建て始めたが、神はそれまで同じだった人間の言語を混乱させた［**F**・二三四］。

（5）the finisher/And Author of my faith.「ヘブライ人への手紙」12・2「信仰の創始者であり完成者であるイエスを見つめながら」［**RA**・五八一］。

（6）Serpents.「民数記」21・6「それで主は炎の蛇を民の中に送られた、それで蛇は民を噛みイスラエルの民から多くの死者が出た」［**RA**・五八一］。

（7）bruis'd reed.「イザヤ書」42・3「彼は傷ついた葦を折ることなく、暗くなってゆく灯心を消すことなく、裁きを引き出して真実に到ろうとする」。これはキリストを預言するものと受け取られ、最初の節は欽定訳の一六四九年版では「彼は弱く衰えた人を傷つけるのではなく支え慰めようとする」と注解されていた［**RA**・同］「マタイによる福音書」12・20にも全く同一の文がある［**F**・二三五］。

（8）欽定訳に二度目の「私は」が付加されている。「**聖書**」“Holy Scriptures”［**M**・四四一］の五行目「汝の隠された石の中にマンナがある」、及び、「**規則と教訓**」の二八行目とその訳注［**小考**（五）2、7］「彼らの**星**を　あの**石**と**隠されていた食物**を　鎮めたのだ」を参照［**F**・同］。

一四行詩三連から成り、いずれもABCCABDEFFDEGGの型で押韻し、四行目と一〇行目が四音節、一三行目が八音節、最終行が六音節という美しく整った詩。こうして整然たる〈反抗〉ではあったが、その結果〈悲惨〉な思いをするに到り、神に許しを〈懇願〉することになる。

第一部から第二部へと眼を凝らしてゆくとその後半部へ移る辺り、「**驢馬**」の次に「**隠された宝**」に出逢う。「**世界**」［**小考**（二）62］の一三行目に既に「貴重な〈宝〉」が出ていたが、ずっと凝視め続けていると、〈隠された宝〉へのこの語り手の歩みが、みえてきそうなのである。

隠された宝　The Hidden Treasure

「マタイによる福音書」第十三章第四十四節(1)

〈王〉[2] 位を継ぐ人は何が出来るだろうか？
以前に為されたことそのままなら何ら新しい事ではない。
私に純粋な光の一条（すじ）だけでも見せてくれるのは誰なのか？
紛いものの星と火を噴く龍[3]、これら御身を騙して挫こうと
明らかにされた夜の策略は　自慢にはならない、
そのような〈石炭〉の炎はせいぜいでも〈厨（くりや）〉の部屋し
　か照らさない。
それで私の目にする人々が隈なく捜し回ったのだ、そうだ
あの、この三千年の時をかけて落されて
回顧する人々の眼を晦ますものを悉く、それで私は
全てが為された今、全ては虚しいと思う。
あの、賢者を悩ます秘密の探索につぐ探索を、
〈禿鷲〉の眼から隠されている小径[4]を
私は遠方に見たが、そこではあの果実が育っている
他の人はそれを唯手探りし手に入れたくて競うだけだが[5]。
　　世の中が愛好する知識は（この世の友人たちは
他には何もないと考えているが）恐しい縁（ふち）と
それが導いてゆく崖から飛べとは私に命じなかった
私以上に有益に利用できそうな者は誰もいないのだから。
　人間のいつもの罪、あの感染する欲求
それは自然が育て　ある繊細な資質（クレイ）が
穏やかな懇切な手際で　しかも強力な作用を及ぼす骨折り
を苦痛を伴わずに気軽に続けて招き寄せるものだが、
更に優れた美が私の眼を支配することはなかったものの、
その罪に欲求に　これ以上溺れたり素早く誘惑される者は
　誰もいないだろう。
しかしそのような甘美なものは酸っぱいし、ここ地上では
　毒があるので
というのもそこでは不純な種子が一年中生長し
内輪の〈蠟燭[6]〉が　**自ずから**その日を
見つけ出そうとする人々さえも誤らせるのに役立つだけだ
　からだが
私は我が眼を封印し　御身の命令に
我が粗野な心を従わせ　我が両手を抑制しよう、
私は何もしない、何も知らないし、見ないでおこう
唯御身が私に命令し　示し教え賜うこと以外は。
見たまえ　御身が与え賜うたものを、私が実際取り戻すも
　の全て[7]を
一つのもの以外は、とは言え　かつて一度手に入れたこと[8]
　はあるものだが。

［M・五一九―二〇］

訳注

（1）「天の王国は、次のように譬えられる、畑に宝が隠されている、それを見つけた人はそのまま隠しておき、それを喜びながら出かけてゆき、持ち物を全て売り払ってその畑を買う」。

（2）一六五五年版にはここに＊印があり、「伝道の書」2・12と作者の自注がある。「また私は我が身を顧みて知恵を狂気を愚行を見極めようとした、王の後から来る人が何が出来ようか、既に為されたことだけなら」。それで私には分った、光が闇に優る限り知恵は愚行に優ると、と第十三節に続く。

（3）fire-drakes.=Either fiery meteors or will-o'-the-wisps. 燃え立つ流星か、鬼火［F・三二〇］。

（4）「ヨブ記」28・7「猛禽が知らず禿鷹の眼にも見えなかった小径がある」［M・七五〇］。神の知恵を讃美した章。

（5）一行目からこの一四行目まで以下を参照。「**霊の己惚れ**」（夜明けに近隣の泉に出かけてゆき、自然の造化の妙に心打たれた「私」がその創造主との交歓を希う趣旨の作品）［**小考**（二）59―60］。

「**嵐**」［**小考**（七）16―21］の三九―四〇行目「何が出来るのだろう／こういう新しく発見されたものは、溺れ死ぬ以外に？」

従兄弟（cousin. いとこ、またいとこ、はとこ、縁者のいずれかは不確定［H・二〇六］）のAubrey 宛ての書翰（1680.6.28）「私自身はといえば（これ以上高く昇ったことは一度もなかったが）学問の裾野と低い部分にほんの一寸愛着を覚えただけで、全ての手で掴んだが僅かしか得られなかった。自然も運も私の志を嘉してくれなかった」［M・六九三・一九―二二］参照。［M・七五〇］。

（6）private Tapers. 個人の啓示の光［RA・六二五］。

（7）冒頭の福音書の一節に鑑みて「一つのもの」とは天の王国に違いない。この詩人は、一つのものだけを得たらその礼として、自分は神から与えられたもの全てを返すと言っているのだ［RA・六二五］。

（8）purchas'd once before. 唯一度限り十字架上のキリストによって［同］。

二行目のみ十一音節であとは全て十音節の詩行、計三四行が、二行ずつ押韻する二行連句の作品。

引き続き今少し、火花の姿を見詰めてみたい。

＊参考文献　本稿で直接言及したものについては文中では各文献の上に記した略記号で示す。数字はそのページ表示。

[A] Austin. Frances. *The Language of the Metaphysical Poets*. London : The Macmillan Press, 1992.

[B] Beer, Patricia. *An Introduction to the Metaphysical Poets*. London : The Macmillan Press, 1972.

[BE] Blunden, Edmund. *On the Poems of Henry Vaughan : Characteristics and Intimations*. London : Cobden Sanderson, 1927 ; rpt. New York, 1969.

[BEI] Blunden, Edmund. *Lectures in English Literature*. Tokyo : Kodokan, 1952, 2nd ed.

[BEII] Blunden, Edmund. *Nature in English Literature*. London : The Hogarth Press, 1949. 1st. ed. 1929.

[BH] Bloom, Harold, ed. *John Donne and the Seventeenth-Century Metaphysical Poets*. New York, New Haven, Philadelphia : Chelsea House Publishers, 1986.

[B・P] Bradbury, Malcolm and David Palmer, eds. *Metaphysical Poetry* (Stratford-upon-Avon Studies 11) London : Edward Arnold, 1970.

[BS] Bethell, S. L. *The Cultural Revolution of the Seventeenth Century*. London : Dennis Dobson, 1951.

[C] Chambers, E. K., ed. *The Poems of Henry Vaughan, Silurist*. Introduction by H. C. Beeching. 2vols. London and New York : Charles Scribner's & Sons, 1896.

[D] Durr, R. A. *On the Mystical Poetry of Henry Vaughan*. Cambridge, Massachusetts : Harvard University Press, 1962.

[E] Empson, William. *Seven Types of Ambiguity*. London : Chatto and Windus, 1930 ; Penguin Books, 1961. 174–75. [岩崎宗治訳『曖昧の七つの型』(研究社 一九七四) 二一一一一一一一五]。

[F] Fogle, French, ed. *The Complete Poetry of Henry Vaughan*. New York : Doubleday. 1964 ; New York University Press, 1965.

[FK] Friedenreich, Kenneth. *Henry Vaughan*. Boston : Twayne Publishers, 1978.

[G] Gardner, Helen, ed. *The Metaphysical Poets*. London : Oxford University Press, 1961.

[GH] *Seventeenth Century Studies presented to Sir Herbert Grierson*. London : Oxford University Press, 1938 ; rpt. New York : Octagon Books, INC., 1967.

[GR] Garner, Ross. *Henry Vaughan : Experience and the*

Tradition. Chicago : University of Chicago Press, 1959.

[H] Hutchinson, F. E. *Henry Vaughan : A Life and Interpretation*. Oxford : Clarendon Press, 1947.

[HE] Holmes, Elizabeth. *Aspects of Elizabethan Imagery*. Oxford : Basil Blackwell, 1929.

[HE-] Holmes, Elizabeth. *Henry Vaughan and the Hermetic Philosophy*. Oxford ; 1932 ; rpt. New York : Haskell House, 1966.

[HG] Hammond, Gerald, ed. *The Metaphysical Poets : A Casebook*. London and Bashingstoke : The Macmillan Press, 1974.

[H · S] Healy, Thomas and Jonathan Sawday, eds. *Literature and the English Civil War*. Cambridge : Cambridge University Press, 1990.

[L] Leishman, J.B. *The Metaphysical Poets : Donne, Herbert, Vaughan, Traherne*. Oxford : Clarendon Press, 1934.

[LH] Lyte, H. F., ed. *The Sacred Poems And Private Ejaculations of Henry Vaughan*. Boston : Little, Brown and Company, 1865.

[M] Martin, L. C., ed. *The Works of Henry Vaughan*. Oxford : Clarendon Press, 2nd ed. 1957.

[M-] Martin, L. C., ed. *Henry Vaughan : Poetry and Selected Prose*. London : Oxford University Press, 1963.

[ME] Miner, Earl. *The Metaphysical Mode from Donne to Cowley*. Princeton : Princeton University Press, 1969.

[ML] Martz, Louis L. *The Paradise Within : Studies in Vaughan, Traherne, and Milton*. New Haven and London : Yale University Press, 1964.

[ML-] Martz, Louis L. *The Poem of Mind : Essays on Poetry/English and American*. New York : Oxford University Press. 1966.

[ML:=] Martz, Louis L. *The Poetry of Meditation : A Study in English Religious Literature of the Seventeenth Century*. New Haven and London : Yale University Press. 1962. 1st ed. 1954.

[P] Pettet, E. C. *Of Paradise and Light : A Study of Vaughan's "Silex Scintillans"*. Cambridge : Cambridge University Press, 1960.

[R] Richmond, H. M. *Renaissance Landscapes : English Lyrics in a European Tradition*. The Hague : Mouton,

1973.
［R A］Rudrum, Alan, ed. *Henry Vaughan : The Complete Poems*. New Haven and London : Yale University Press, 1976.
［S］Simmonds, James D. *Masques of God : Form and Theme in the Poetry of Henry Vaughan*. Pittsburgh : University of Pittsburgh Press, 1972.
［S R］Schuchard, Ronald, ed. *The Varieties of Metaphysical Poetry By T. S. Eliot/The Clark Lectures at Trinity College, Cambridge, 1926 and/The Turnbull Lectures at The Hopkins University, 1933*. London : Faber and Faber, 1993.［ロナルド・シュハード編注『T・S・エリオット クラーク講演』村田俊一訳（松伯社　二〇〇一）］。
［S・V］Spencer, Tneodore,and Mark Van Doren. *Studies in Metaphysical Poetry : Two Essays and A Bibliography*. Port Washington, N. Y. : Kennikat Press, 1939.
［T］Tuve, Rosemond. *Elizabethan and Metaphysical Imagery*. The University of Chicago Press : 1947 ; rpt. Phoenix Books, 1961.
［W］Whittier, John Greenleaf, *Anti-Slavery Poems : Songs of Labor and Reform*. London : Macmillan and Co., 1889.
［W G］Williamson, George. *The Donne Tradition : A Study in English Poetry from Donne to the Death of Cowley*. New York : The Noonday Press Inc., 1958. 1st ed. 1930.
［W G i］Williamson, George. *A Reader's Guide to the Metaphysical Poets*. London : Thames and Hudson. 1968.
［W H］White, Helen C. *The Metaphysical Poets : A Study in Religious Experience*. New York, 1936 ; rpt. New York : Collier Books, 1966.
［W i L］Wilcox, Helen, ed. *The English Poems of George Herbert*. Cambridge : Cambridge University Press, 2007.
［d e V］Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery*. Amsterdam・London : North-Holland Publishing Co., 1974.
［荒川］荒川光男「黙想詩「夜」を読む」（『十七世紀英文学のポリティックス』十七世紀英文学会編、金星堂、一九九九。一八一—九七）
［川崎1］「ヘンリー・ヴォーンの自然神秘主義」（川崎寿彦『薔薇をして語らしめよ—空間表象の文学』名古屋大学出版会、一九九一。一七四—九八°）

[川崎2] 川崎寿彦『鏡のマニエリスム――ルネッサンス想像力の側面』研究社、一九七八。一五二―五八。
[松崎] 松崎毅「ルーパート王子と「鷲」――ヘンリー・ヴォーンの世俗詩と検閲をめぐる論考――」(『十七世紀と英国文化』十七世紀英文学会編、金星堂、一九九五。一七二―九二)

本誌連載のこれまでの拙稿は左記のように略記、算用数字はそのページを表示。

[**小考**(一)]「アスク川の白鳥――ヘンリー・ヴォーン小考」「成城文藝」第一九九号、1―24、二〇〇七年六月。
[**小考**(二)]「その瞑想を追い始める――ヘンリー・ヴォーン小考(二)」「同」第二〇〇号、47―67、二〇〇七年九月。
[**小考**(三)]「〈死〉からの再出発――ヘンリー・ヴォーン小考(三)」「同」第二〇一号、13―33、二〇〇七年十二月。
[**小考**(四)]「「序文」と「反歌」に包まれて――ヘンリー・ヴォーン小考(四)」「同」第二〇二号、1―32、二〇〇八年三月。
[**小考**(五)]「複眼による並置比較思考――ヘンリー・ヴォーン小考(五)」「同」第二〇三号、1―27、二〇〇八年六月。
[**小考**(六)]「追求は異なる角度、視点から――ヘンリー・ヴォーン小考(六)」「同」第二〇四号、15―42、二〇〇八年九月。
[**小考**(七)]「花と星へ　嵐と夜から苦悶に耐えて――ヘンリー・ヴォーン小考(七)」「同」第二〇五号、13―43、二〇〇八年十二月。

拙訳での〈 〉付きとゴチック体は、原詩ではそれぞれ大文字で始められる語句とイタリック体部分である。

*本稿は二〇〇八年度成城大学文芸学部特別研究助成による成果の一部である。